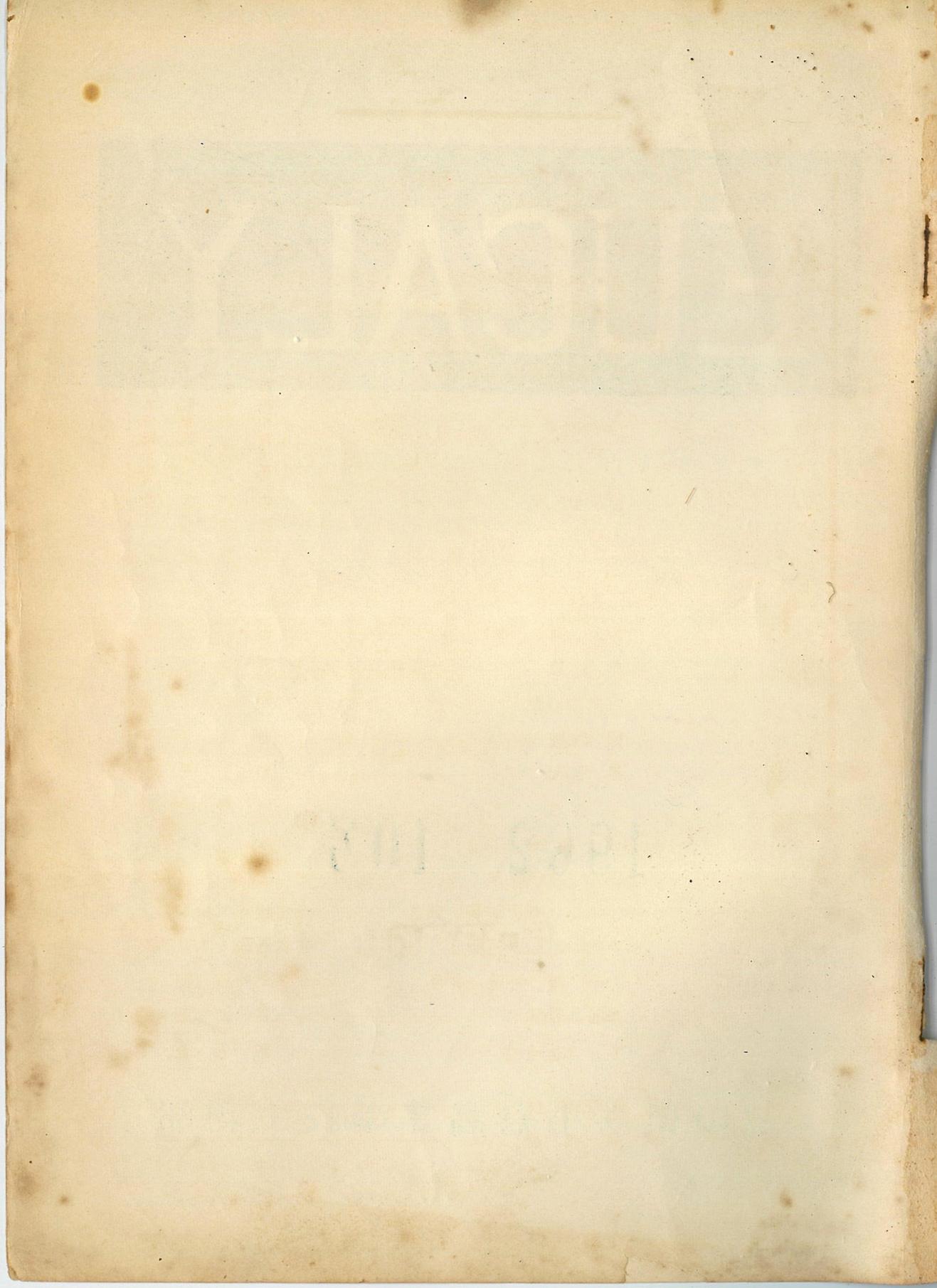
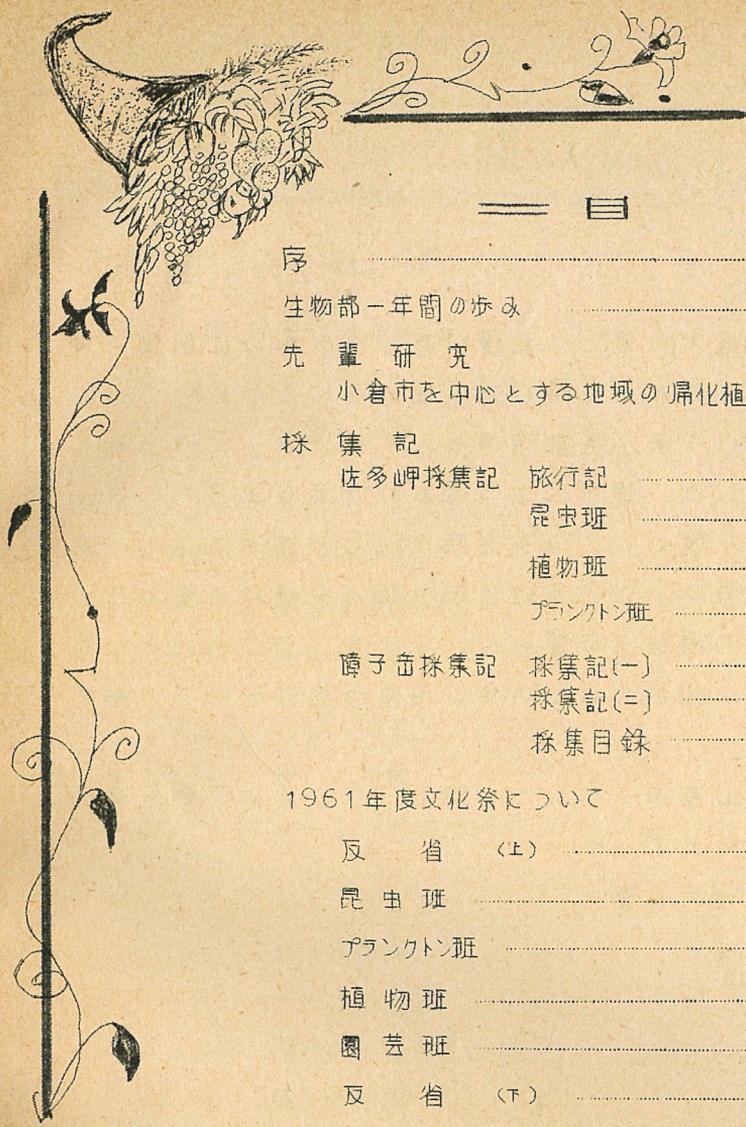


EUCALY

1962 10号

福岡県立小倉高等学校生物部





— 目 次 —

序	2
生物部一年間の歩み	3
先 輩 研 究		
小倉市を中心とする地域の帰化植物	—— 奥 村 晃 久	5
採 集 記		
庄多岬採集記		
旅行記 田 中 丸 邦 雄	13
昆虫班 { 酒 大 新 井 伊 森 } 中 丸 邦 雄 正 忠 雅 浩 正	23
植物班 { 酒 大 新 井 伊 森 } 中 丸 邦 雄 正 忠 雅 浩 正	30
プランクトン班 { 酒 大 新 井 伊 森 } 中 丸 邦 雄 正 忠 雅 浩 正	36
障子岬採集記		
採集記(一) 中 野 国 政	43
採集記(二) 武 智 昭 一	45
採集目録 武 智 昭 一	46
1961年度文化祭について		
反 省 (上) 中 野 国 政	50
昆 虫 班 武 智 昭 一	52
プ ラ ン ク ト ン 班 伊 藤 正 彦	52
植 物 班 井 上 浩 輔	53
園 芸 班 新 上 義 昭	54
反 省 (下) 中 野 国 政	55
私 達 の 研 究		
あ、フランキ 田 中 丸 邦 雄	56
吸水による蒸散量の測定 安 田 敏 子 ・ 松 永 妙 子	61
P・T・Cの味旨研究 佐 藤 幹 雄 ・ 木 村 邦 夫	62
1961年昆虫班の反省 武 智 昭 一	67
酵母の発酵 井 上 浩 輔	68
私と羊歯植物 新 谷 雅 宏	72
部 員 住 所 録	75
編 集 後 記	76

序

中野 国政

自然を愛する事は偉大な事だ。私達はあらゆるものに自然の神秘性・力強さ・荒々しさとして優しさを感じる。又それらが合わさって奥にすばらしい「美」を創造する。人は「美」に引かれる。深海の持つ神秘的な美しさ。種子が土をおしのけ芽を出すたくましい、若いエネルギーの美しさ。全天を駆けめぐりすべてのものを寄せつけない雷鳴の荒々しさ。深紅に照り輝く夕焼けの美しさ。あらゆる草木のつける優雅な可愛らしい花や果。自然をにくむ者がいるとしたらそれは魂のない人々だ。宇宙は自然に始まり自然に終る。

自然を愛する事の出来る人はみな「詩人」だ。心に感動を憶えを時たえ文字に表われずとも……。

自然を愛する事は偉大な事だ。



生物部一年間の歩み

1961年:

- 3月31日 ユーカリ原稿しめ切り。
- 4月15日 クラブ紹介。
- 23日 新入部員歓迎採集会(福智山)。
- 29日 福智山採集。
- 5月 9日 班編成・一年の計画。
- 28日 障子岳採集。
- 福智山採集。
- 31日 小倉城壕にてトンボ採集。
- 6月 9日 安富氏来部。
- 11日 福智山採集。
- 22日 ユーカリ完成。
- 7月 2日 平尾台採集。
- 障子岳採集。
- 4日 夏休み計画。
- 9日 障子岳・福智山採集。
- 21日 障子岳採集。
- 23日～26日 佐多・都井岬採集旅行。
- 26日 障子岳採集。
- 8月 3日 新幹事選挙。
- 11日 植物標本整理。
- 17日 刈田海岸七面草採集。
- 26日 刈田海岸七面草採集。
- 9月 9日 戸畑高校文化祭見学。
- 10日 西高文化祭見学。

- 9月17日 北九州昆虫展にて学校賞受賞。
刈田海岸ヒメ草採集。
- 23日 福智山採集。
- 25日 モルモット購入。
- 10月 1日 運動会・クラブ紹介行進。
- 22日 福智山・刈田・曾根海岸採集。
- 11月 2日 文化祭。
- 3日 文化祭・反省会。
- 12月 3日 福智山採集。
- 17日 三年生送別会。
先輩より熱帯魚多数寄贈さる。
- 1962年：
- 2月13日 文化部幹事会・予算の件。
- 3月10日 平尾台採集・青龍窟。
- 13日 キクガシラコウモリ写真撮影す。
- 17日 予算委員会。

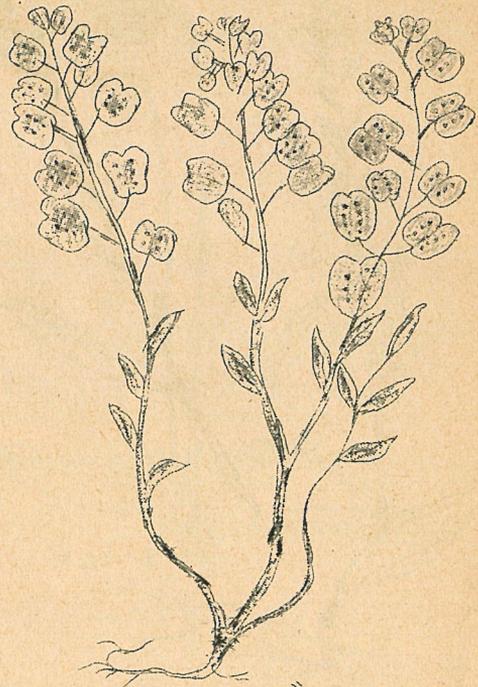
▷ 先輩の研究 ◁

昨年卒業した奥村さんが在学中に研究していた帰化植物の研究について、これまでユーカリに載せる機会がなかったのでここにその一応の成果を記載しておきます。

× × × × ×

小倉市を 中心とする地域の 帰化植物

奥村 晃久



ゲンバイナズナ

私は高校生活三年の間に、日明の海岸から門司税関付近に至る地域の帰化植物を主に採集研究してきたのでここに発表してみたいと思う。

高校生になってから、何度か植物を採集しているうちに、2・3の外來植物を見出し「果してこの付近にはどれほどの又どのような帰化植物が存在しているのだろうか」という疑問をいだいた。そして、この地域は外国船の停泊する門司港の岩壁などの入国する可能性の大きい地理条件にめぐまれているので、採外の結果が得られるのではないかと期待したのであった。

一昨年、つまり昭和33年6月29日門司港の岩壁及び貨物列車引込み線路付近で植物の採集会が開かれた。これが私の研究の第一歩だったと記憶している。

発表をするに当って、まず最初に帰化植物とはどんなものであるか、言い換えれば「帰化植物の定義」をしておかねばならないと思う。

「帰化植物とは、その本來自生している地域から他の地域へ、人類によって、意識的に又無意識的に運ばれ、その地に野生の状態で繁殖している一群の植物である」と言うことができる。



ホソムギ

ここで、「意識的」というのは、人類に利益をもたらす植物を人類がある目的のために、つまり作物・野菜・薬用・飼料用・牧草・鑑賞用などとして輸入するということである。これらの代表的な例としては、薬用「ハッカ」「カミツレ」、牧草「ウマゴヤシ」、鑑賞用「ムラサキカタバミ」「ニワゼキショウ」、飼料用「カラスムギ」等がある。又「無意識的に」というのは「ツメクサ」のように、輸入貨物の破損を防ぐために詰め込まれたり、貨物に付着したりして、人知れず入国することを指している。

「意識的」つまり輸入された植物の帰化した年代は明らかであるが、「無意識的」な方のものは、いつをもってその帰化年代として記録するかという点が疑問となって来る。時代をさかのぼると、我々の主食たる米も有史前に熱帯地方から人と共に入国したものであると考えられる。稲のみならず種々の野草がその頃稲と共に入国したであろうと考えられる。水田附近の一年草である「カズノコグサ」、「タネツケバナ」、「カマツリクサ」などはこの類であろうと考えられている。又遣隋・遣唐の行われた時代にも当然支那からの帰化品であったと考えられる。しかし記憶がないためほとんどすべてが不明である。

そこで一般には、江戸時代の後半頃以後入国したものを帰化植物といている。但し栽培されているものはこれには該当せず、その栽培の範囲を越えて野生の状態に繁殖しているものを指す。そして帰化年代はその植物が最初に発見され採集された時又は最初に文献に現われた時を以て記すことになっている。だから当然真の帰化年代とはいくらかくい違っている。

帰化植物一般論であるが大抵のものは帰化当時は旺盛に繁殖しているが、次第に衰退し減っていく傾向があるようだ。「ヒメムカシヨモギ」、「ヒメジョーン」、「アレチノギク」、「マツヨイグサ」、「オオマツヨイグサ」、「ダンドボロギク」、「マンテマ」などがそれである。特に「ダンドボロギク」は昭和18年頃に三河地方の山中で発見され

た。入国経路不明な植物で、山焼きを行った後に急激に繁殖しそして衰退していく植物として有名である。

なぜ盛衰の変化が激しいのだろうか。

(一) 農作物の中で連作を嫌うものがあるのと同じ様にこれらの植物も同じ場所には永く生きていくことが出きず。

(二) 植物自身の老廃物がその植物の生育を阻害している。などが理由として考えられますが、確かな証拠はありません。今後の大きな問題点であると思われる。



ハラオオバコ

しかし一方帰化した植物が在来植物を圧倒する場合も少なからずある。オランダからの帰化植物である、「オランダミミナグサ」が在来の「ミミナグサ」を圧倒してしまい、今ではミミナグサは山地にのみしか見当たらない。現在一般に「ハコベ」と言われているものは在来種の「ミドリハコベ」を圧倒した、明治初期に入国した、「コハコベ」である。木本の帰化植物の例をあげてみると「キンシバイ」、「ミツマタ」、「ニワウルシ」がある。之等は皆観賞用製紙用として栽培されていたものが野生化したものである。

今まで私が採集した植物の名とその原産地、推定帰化年代を表にしてみると次のようである。

		(原産地)	(帰化年代)
たで科	「アレチギシギシ」	欧州	明治38年
ひゆ科	「ハイビユ」	欧州	大正10年(稀)
なでしこ科	「オランダミミナグサ」	欧州	明治末期
あぶらな科	「ガンバイナズナ」	欧州	江戸時代(希)
	「マメガンバイスズナ」	北米	明治25年
	「カキネガラシ」	欧州	不明(稍稀)

	「イヌカキネガラシ」	アジア北部, 欧州	不明
まめ科	「ムラサキツメクサ」	欧州	明治初年(稀)
	「ウマゴヤシ」	欧州	江戸時代
	「シナガウハギ」	アフリカ地方	明治20年
とうだいぐさ科	「コニシキソウ」	北米	明治20年
あかばな科	「コマツヨイグサ」	北米	明治時代
せり科	「マツバゼリ」	ブラジル	明治26年
ひるがお科	「セイヨウヒルガオ」	不明	昭和20年頃
	「フラサバソウ」	欧州	明治初年(稀)
きく科	「セメジヨオン」	欧州	明治初年
	「ノボロギク」	欧州	明治時代
	「アジアタンポポ」	シベリア, 蒙古	大正末~昭和初
いね科	「ホソムギ」	欧州	明治年代
おおばこ科	「ヘラオオバコ」	欧州	幕末の頃

何しろ植物採集の未経験者が始めた、わずかに三年間のすねかじり程度の研究ですから、この地域にはこれ以外にまだ多数の帰化植物が存在していると思われる。この地に於ける帰化植物の盛衰、いわゆる変遷は察知することが出来なかった。しかし、これから後注意深い観察をすることによって、絶えることなく、かげろふのように姿を現わしては消えていく可憐な外来植物の変遷を見ることが出来るであろう。この過程を観察し、記録していくためには、数十年いやそれ以上の長年月が必要であると思う。そしてこの観察記録は、ひいては「植物に関する現在不明の点の解明の鍵になるかもしれない」と思われる。ささいな研究であるが、我々生物部員としては以後出来る



ムラサキツメクサ

あぶらな科

<i>Thlaspi arvense</i> L.	ぐんばいなずな	原・欧洲(稀) 徳川時代
<i>Lepidium virginicum</i> L.	まめぐんばいなずな	原・北米(稍普通) 明治 25
<i>Nasturticum officinale</i> R, Br.	おらんだがらし	原・欧洲(稍普通) 明治初年
<i>Sisymbrium officinale</i> Scop.	かきねがらし	原・欧洲(特稀)? 門司(1930)
<i>S. orientale</i> L.	いぬかきねがらし	原・欧洲アジア北部(稍普通)
<i>Noslia paniculata</i> Dasvawx.	たまがらし	原・欧洲 大正 初

ばら科

<i>Potentilla paradoxa</i> Nuttall	をきじむしろ	原・欧洲(稀) 小倉 昭和 25
------------------------------------	--------	------------------

まめ科

<i>Trifolium repens</i> L.	しろつめくさ	原・欧洲(最普通) 弘化年間
<i>T. pratense</i> L.	むらさきつめくさ	原・欧洲(稍稀) 明治維新
<i>Medicago lupulina</i> L.	こめつぼうまごやし	原・欧洲(稍普通) 徳川時代
<i>M. sativa</i> L.	むらさきうまごやし	原・欧洲(稀) 小倉 1955 年向
<i>Melilotus suaveolens</i> Ledeb.	しながわはぎ	原・タフリヤ地方(稍普通) 明治 20
<i>M. alba</i> Peser	しろはなしながわはぎ	原・欧洲(稀) 小倉 弘化 2

ふうるそう科

<i>Geranium carolinianum</i> L.	あめりかふうろ	原・北米(稀)? 小倉(1959)
---------------------------------	---------	-------------------

かたばみ科

◎ <i>Oxaris martiana</i> Zucc.	むらさきかたばみ	原・北米(最普通) 徳川時代
--------------------------------	----------	----------------

にかき科

◎ <i>Alanthus altissima</i> Swingle.	にわうるし	原・中国(普通) 明治 10
--------------------------------------	-------	----------------

とうだいがさ科

◎ <i>Euphorbia maculata</i> Willd.	こにしきそう	原・北米(最普通) 明治 20
------------------------------------	--------	-----------------

おとぎりそう科

<i>Hypericum patulum</i> Thunb.	さんしばい	原・中国(普通)?
---------------------------------	-------	-----------

あかばな科

◎ <i>Oenothera Lamanckiana</i> Ser.	おおまつよいぐさ	原・北米(稍稀) 門司 明治初年
<i>O. odorata</i> Jacq	まつよいぐさ	原・ナリ(普通) 嘉永年間?
<i>O. sinuata</i> L.	こまつよいぐさ	原・北米(普通)? 明治年間?
<i>O. parviflora</i> L.	あれちまつよいぐさ	原・欧洲(普通) 明治 25

せり科

Apium Ammi Urb. まつばせり 原・ラジル(普通)明治26
さくらそう科

Anagallis arvensis L. りりはこべ 原・欧米(稍普通)徳川時代
ひるがお科

Ipomoea triloba L. ほしあさがお 原・?(稍)小倉(富野1957)圃

Convolvulus arvensis L. せいようひるがお 原・?(稍)門司(白木崎太里)
1957

昭和20年以後

むらさき科

Lithospermum arrense L. いぬむらさき 原・欧州(稀)門司,大正年間?

しそ科

Mentha viridis L. var. *crispa* Benth. おらんだほっか 原・欧州(稍普通)文政年間
なす科

Salpichroa rhomboidea Miers. はこべほおずき 原・南米(稀)小倉1958 聲殺後

Physalis angulata L. せんなりほおずき 原・熱帯アフリカ(普通)?

Datura Stramonium L. しろばなちようせんあさがお 原・熱米(稍普通)明治維新以後

D. Tatula L. よしゆちようせんあさがお 原・熱米(稍普通)明治維新以後

Solanum carolinense L. おになすび 原・欧州(稀)小倉(平尾台)
(1958) 昭和9年頃

こまのはぐさ科

Verbascum Blattaria L. もうずいくわ 原・欧州(稀)?門司(大里)

Veronica persica Poir. おおいぬのふぐり 原・欧州(普通)明治20

V. arvensis L. たちいぬのふぐり 原・欧州(普通)明治17

V. hederifolia L. ふらさばそう 原・欧州(稀)門司(和布川)
(1957) 明治初年

V. bonariensis L. さんじゃくはーべな 原・?小倉(浅野理立)(1958)
朝鮮動乱当期

おぼこ科

Dianthus lanceolatus L. へらおぼこ 原・欧州(稍普通)幕末の頃

きく科

Gnaphalium sylvaticum L. たちちこぐさ 原・欧州(稍普通)大正末~
明治初

Cotula australis Hoouf. まめかみつれ 原・濠洲(稀)門司(和布川)
(1954) 昭和17頃

Ambrosia artemesifolia var. *elatior* Descou. ふたくさ (稀)門司(1958)
小倉(1957)明治初年

A. trifida L.	くわもどき	原・? (稀) 小倉(曾根) ⁽¹⁹⁵⁷⁾ <small>尊積</small>
◎ Solidago canadensis L.	かなだあきのきりんそう	原・北米(普通) 明治年間
◎ S. serotina Aitov	おあわだちそう	原・北米(普通) 明治年間
Erigeron annuus Pers.	ひめじょおん	原・歐洲(最普通) 明治維新
E. bonariensis L.	あれちのぎく	原・北米(最普通) 明治25
E. canadensis L.	ひめむかしよもぎ	原・北米(最普通) 明治初年
var. levis Makino.	はなしひめむかしよもぎ	日本で出現した変種 門司
Erechtites hieracifolia Rafin.	だんどぼろぎく	原・米(普通) 昭和18
Aster subulatus Michx.	ほうきぎく	原・米(普通) 明治末年
A. tradescantii L.	和名なし	原・? (稀) 小倉(浅野埋立) ⁽¹⁹⁵⁸⁾ 朝鮮動乱当時
Senecio vulgaris L.	のぼろぎく	原・歐洲(普通) 明治初年
Bidens frondosa L.	あめりかせんだんぐさ	原・北米(普通) 大正年代
B. Pilosa L.	こせんだんぐさ	原・? (稍稀) 小倉 ?
Heterotheca subarillaris Brit. et Rusy.	和名なし	(稀) 小倉(浅野埋立) ⁽¹⁹⁵⁸⁾ <small>朝鮮動乱当時</small>
Taraxacum officinale Web. var. genuinum Uoch.		
	せいようたんほほ	原・歐洲(普通) 明治37
T. asiatica Dablest	あじあたんほほ	原・シリア蒙古(普通) 大正末~ 昭和初
Soychus asper hill	おにのげし	原・歐洲(普通) ?
Helenium tenuifolium Nutt.	いとぎく	原・? (稀) 小倉(浅野埋立) ⁽¹⁹⁵⁸⁾ 朝鮮動乱当時
いね科		
Briza minor L.	ひめこばんそう	原・歐洲(最普通) ?
B. maxima L.	こばんそう	原・歐洲(稀) 門司(松分I)?
◎ Avena fatua L.	からすむぎ	原・歐洲(普通) ?
Phalaris canariensis L.	やりくさよし	原・地中海(稀) 門司(大里) ⁽¹⁹³³⁾ 幕末の頃
Bromus cotharicus Vabl.	いぬむぎ	原・南米(普通) 明治初年
Lolium Perenne L.	ほとむぎ	原・歐洲(普通) 明治年代
Dactylis glomerata L.	かもかや	原・歐洲(稍普通) 文久年間
Festuca myuros L.	なぎなとかや	原・歐洲・北阿(普通) 明治年間
◎ Poa pratensis L.	ながはぐさ	原・歐洲(稍稀) 小倉(曾根・ 横代) 明治初年
Chloris virgata Swarty.	ようせんおひしば?	原・熱帯アフリカ(稀) 門司 (筑内構内) 小倉(糸織直後)

<i>Paspalum distichum</i> L.	きしゅうすずめのひえ (稀) 小倉 (浅野 埋立)	
	普通型に比し大型、生育状態及び根の状況より推してアメリカより帰化したものと思われる。	朝鮮 動乱 当時
<i>P. urvillei</i> Steud.	たちすずめのひえ	原・南米 (稀) 小倉 (浅野 埋立) (1958) 朝鮮 動乱 当時
<i>Sorghum halepense</i> Pers.	せいばんもろこし	原・地中海 (稍稀) 門司・小倉 (1957) 昭和 18 年
<i>Bothriochloa ischaemum</i> L.	ちやせんかものほしきや?	原・? (稀) 門司 (税関 橋内)
<i>Digitaria chinensis</i> Hornem.	こめしば?	原・熱帯 (最普通)
<i>Eragrostis megastachya</i> Link.	すずめがや?	原・旧世界 (稍普通)
<i>Eichornia crassipes</i> Solms-Lamb?	ほていあおい	原・熱帯 アメリカ (稍普通)
<i>Sisyrinchium atanticum</i> Bicknell.	にはせきしょう	原・北アメリカ 東部 (最普通) 明治 20
<i>Bromus sterilis</i> L.	せいようすずめのちやひき	明治 末年
	☆ ☆ ☆ ☆	

本種は吉岡氏が 1939 年 5 月下関市長府での採品に対し、本田博士の和名を付せられたもので、大井博士の日本植物誌にはアレチのチャヒキ、久内氏の「帰化植物」にはニセキツネガヤとそれぞれ、出ているが、邦産スズメノチャヒキとは、かなり異った感じのするもので、どちらかといえば、キツネガヤに似ているので、ニセキツネガヤもよいが、アレチノチャヒキの和名を使った方が無難であろう。門司では本年初めて採集した。原・アメリカ 明治 45 年 5 月に採れた記録がある。



パイナップル

採集記

佐多岬採集記

佐多岬採集旅行記

3 年 田中丸 邦 雄

計画をたてるのは難しい。しかし実行される時は少

少あっけない。そして終わった後、苦痛は全くなく、ただ楽しい思い出ばかり。こうなるのが旅の常であり、理想であろう。-----

夏休み。今年もまた佐多岬と決った。去年にひき続きこれで二度目である。昨年得た経験をもとにして、得られなかった植物や昆虫を徹底的に採集すべく、再び佐多へ赴く事になったのである。

昭和36年7月23日、夜、

部員7名と大先輩の土井さん、それに太田・高原両先生、及びその他の知らない人々を乗せた鹿児島行普通列車は、太田先生の御家族、仁尾・野村君等の見送りを受けて、ガッタンコと出発した。

それにしても寂しい。部員がたった7名とは。が、少いだけに、各自にかかる責任と負担はそれだけ重くなっている訳だ。そのせいか、皆は明日から四日間の採集に備えて、浩然の気を養うべく、静かに眠りについた。

7月24日、

朝8時半、鹿児島に到着、酒巻君のお父君が、出迎えに来てくれて、自動車で桟橋まで運んでくれた。(有難き幸せ)

ま近に海を隔てて桜島が見える。どんより曇った空を背景にして、いかにも重々しい。やがて長水丸は出港、波をけたてて一路南下する。

この錦江湾の三時間の船旅は素晴しかった。出港したとき小雨まじりだった空が、離れるに依って次第に晴れ、湾の水も紺壁となり、桜島がその美しい姿を見せてくれるようになるのである。ぬけるような空の青さ、そして海、その間に外輪をなす薩摩・大隅の低い山なみの線、これらは美しい対比と調和をなして、船のまわりに広がっていた。

甲板の上で潮風に向い大声で歌った。無人の海上を前にして、声をはりあげるのは奥にそう快なものであった。

潮風でのどがつぶれた頃、船は大根占に到着。あんなに晴れていた空から小雨が降って来て、我々の上陸を祝ってくれた。ヘゴの自生地でも有名な舟木に行くバスの途中、雨足は次第に激しくなり、遂に土砂降りになっていった。窓の外を見ながら全く憂うつになった。このまま雨が降り続いたらどうしよう。今度の計画は間違っていただけは無かったろうか？ こんな事が頭の中を往き来して気持ちが閉ざされてしまった。

しかし、幸運な事にこの雨は舟木に着いた時、からりと上り、雲間から陽光さえさし

て来た。バスをおりて、一同早速あたりを物色しながら、木の間道を歩いて行くと、やがてヘゴがあらわれる。高さ4メートル程の大きな木性シダがヌッと立っている様は、まさに偉観であった。熱帯のジャングルを思い起こさせる代物である。一時間程あたりを採集してまわりユノマチヨウやクロカナブン、タマムシ等をネットにする。

叩細にアトモンチビを落として、しみじみ佐多に近づいた事を感じた。-----我々虫屋には、ヘゴよりも、こんなチッポケな虫の方が奥感をかもするのである。ここでの収穫は何と云っても、大西君のおさえたムツボシシロカミキリであろう。これは今回の旅行の目的の一つであったのだから。

以後ムツボシのとれた、アコウの大木に登って、二十分程叩きまわしたが、ウタカミキリが一頭落ちて来ただけであった。さて、思わぬ収穫があった舟木での採集はそこそこに切り上げて、再びバスにゆられて佐多へと向った。西日をいっぱいを受けて、キラキラ光る海を石手に見ながらバスは南下を続けて行き、佐多丸の碇泊する伊座敷を通過して、山間の道を駛え、寂しい尾波瀬の部落を過ぎ、やがて大泊に到着した。

これから三晩、寝起きする大泊、見覚えのある山が、湾をへだてて夕暮れの中に、横たわっている。ここについてまず目につくのは牛である。堤防に囲まれた海岸の砂浜にあちこちに、黒い牛が、砂浴を楽しんでいる。毎日、夕方になると小屋から解放されて、砂浜に出るのであろう。たてこんだ民家と海にはさまれた砂浜、これに黒牛のとりあわせは、なんだか妙な感じであった。その黒牛を横に眺めながら公民館へ向った。土地の人が、夕涼みに下駄の音をカラカラと云わせて、歩いている。

そんな、のんびりした風景の中であって、大きなリュックをかついだ我々の妻は、いかにも不調和だった。

公民館に着くと既に先客があった。数十人の自衛隊が部屋いっぱい居て、とても泊れそうになかった。先日確かに予約していたのにと、やりきれない気持ちになった。空腹感は一層それを強めた。のんびりした交渉の結果、別棟の方に案内された。自衛隊は明日消えるそうである。

一同ホッと息をついて、畳の上に座りこんだ。遅い晩飯をすませ、土地の青年団長などを交え、明日の事等をワイワイ話しているうちに、夜も更けて来たので、畳に蚤取粉をまき、蚊帳をひいて就寝。

7月25日、晴。

植物班は、外の浦方面へ、昆虫班は岬の突端へ、海産班は残留する事に話が決っていた。朝食を済ませて、先輩の土井さんを含む四人の昆虫班は、すぐさま出かけた。

例によって完全武巻の姿である。

青さが目にしみるように鮮かな、朝の大泊海岸、砂の上を歩きながらイカリモンハンミョウをさがすけれどなかなか見当らない。ここでは、ハマゴウの花上を飛び交うタテハモドキを、胸踊らせながら、追いまわした。どうやら酒巻君がおさえたようだ。海岸の砂浜を過ぎて、旧道の山道にさしかかる。自生のビロウが佳い茂るのを見て、南の国を感じ、叩網にせいを出すけど、丁度山の陰にあたる為か、獲物はほとんど無かった。一行は見事なコモチシダを横目で見ながら、苦しい中にも涼しい木陰道を樂しみながら、やがて峠を越し田尻の新道へ出た。太陽の光が強さを加えはじめ、我々も採集意欲を燃やすけど、虫の方はさっぱりで、アトモンチビや、奈良坂君に云われればサツマヨツマ(ヨツスジトラの事)等の普通種が、ほんの少しとれた程度、昨年あんなにいた、アマミウラナミシジミは影さえも見る事ができなかった。青い青い海が目に入り、うっそうとしたソテツが見えて来ると、皆、ホッと息をつき、松の木陰の芝生の上でしばしの休息。

ここでの収穫は、ハマゴウに来たタテハモドキと、ソテツであった。土井さん及び私は、天然記念物と書いた指定標を見ながら、このソテツをせっせと採集したのであった。

海を見ながら歩いた。昨年、海岸の北端まで来ていた新道は、海岸に面して立っている、ソテツの茂る山の裏側をまわって、田尻部落を通り、岬に行く峠にかかっていた。昨年、オビレや、アヤムネスジを採集した伐採地のあたりは、既に新道になっていた。

あゝ佐多もいよいよ終りが近づいたな。今年が最後かも知れない。これは観光事業のために、次々と破壊されて行く自然を前にした、虫屋の憐れみもなげない遺憾であった。岬に至る峠の道はこの工事のため、おびただしい伐採がなされ、好採集場になっていた。この山道では、汗を流しながら叩網にはげみ、かなりの収穫をあげた。谷にあたる木陰で、高さ1m程の小木を叩くと、ベイツヤサカミキリのようにおどけた足どりで歩くカミキリが落ちて来た。念願セレスウムと思って、感激しながら、管ゼンの中に納めた。後で分った事だが、これは日本でまだとれてない属のものらしいと云う事だった。

その他、岬に着くまでの主な採集品をあげると、オビレカミキリ、ミモフリヒゲナガカミキリ、ワタカミキリ、フタオビミドリトラカミキリ、ケナガカミキリ等である。峠を越えて、下り坂を行く途中、ジャコウアゲハを目標、ネットをかりまわして追

いかけたが逃げられてしまった。

岬神社への分岐点あたりで、何か工事をやっていた。横手の山の上には、木で尺場が組んであった。多分、あそこに展望台が建つのだろう。

白い灯台を近くに見る。岬の突端では、今年もまた、絶壁に咲くボタンボウフウの花上で、ニホンモモブトが、なつかしい姿を見せてくれた。昨年中野君達が大量に採集したアカスジカナムシも、同じ場所に居た。皆は、中食もそっこのけで採集に没頭した。数は昨年より多い。またコミドリトラやホソコハナムグリも、同じ花で、昨年よりずっと数多く採集できた。採集が一段落着いて、日陰に腰を下し、中食をとる。

時計の針は、もうとくに 12 時をまわっている。大きなニギリメシを食べていると、何かガーンと飛んで来た。手づかみでとらえた。それは、フタオビミドリだった。

その後、再び白いボタンボウフウの花で、モモブト及びコミドリの採集を続けた。始め程の収穫は無く、峠を後にして帰途につく。

坂道を登る途中で横にそれ、谷へ下りて見ると、日も大分傾いている上に、あたりは大木が茂っているのがうす暗かった。ミダがうっそうと茂る谷の下の方に、ハゴを発見した。大きな葉を四方に広げていたので、遠くからでもそれと確認できた。ふり返って谷の上を見上げると灰色のテヨウがこちらに降りて来るのが見えた。ヒラヒラと踊るようにして次第に近づいて来る。ツマベニだった。しかし、かなり破損している。ネットを一段に継いで待ち受け、距離を見定め、サッと振った。バサリと云う音は何にもたとえ難い。ツマベニは一瞬視界から消え、やがてネットの中に見出されるのである。感激に浸りながら三角紙におさめ、登り道を急ぐ。皆から相当遅れたので、大急ぎで峠の道を歩いた。採集などする暇も無い。先程ある人夫から、新道まで行けば、5時にトラックの便がある事を聞いていた。それに来るためには、かなり急がねばならなかったのである。行きに2時間程かかった道を、30分足らずのスピードでとばし、ようやく皆に追いついた。酒巻君や土井さんは、華麗なアヤムネスジタマをとらえていた。新道に出た。皆は疲れていたし、特に土井さんのバテ方が激しかったので、トラックに乗る事にした。乗車賃が欠とは云いながら、このトラックは実際ひどいものだった。発車する時、立っていたものだから、危く後から、落ちる所だった。最初から最後までこの調子で、ゆら丸にゆられて、息の根も止るかと思えた。大泊でトラックを降りた時、動かざる大地の有難さを、しみじみ味った。

海岸に出てイカリモンハンミョウをめざした。砂の上を見つめるが、影一つ見当ら

ない。遂に一頭も採集せず、ここを立去った。公民館にたどり着いたのは、7時近くだった。

夕食の後、太田先生達は夜釣りに出かけた。虫屋は残って標本の整理。その後、夜間採集に出かけた。風が強く、空も暗れて、コンディションは悪かった。大泊海岸のハマユウの花を、見てまわったが、期待のセシウムは一頭も顔を見せず、がっかりして引揚げた。

夜釣りに出かけた連中は、小さな魚を二匹ほど下げて帰って来た。それを餌にして大魚を釣り上げる気らしい。虫屋は暗い電灯の下で、標本の整理を続けた。終わったのは一時頃だった。

7月26日、晴。

土井さんは、昨日の疲れで採集はせず伊座敷までお土産を買いに行く事になった。プランクトンは今日も残留である。それで昆虫班の三人と植物の木村君が岬まで行く事になった。白装束に麦わら帽子、サブリュックに弁当とカメラを入れて元気に出発。

朝の大泊海岸では、イカリモンハンミョウを少しばかり、それにタテハモドキである。砂浜を過ぎて旧道に入る。小判型のサツマゴキブリが時折落ちて来る。備いの無いようにと、できるだけ管ビンの中に入れる。その他普通種も再念に採集せねばと思うが、その普通種すら入って来ない。この分では種類数は、昨年より少いかと思われた。山の中腹あたりでイシガケチョウを追った。高い梢の上を三・四頭のイシガケチョウが飛びまわっている。朝日にその白い翅を輝かせて舞う姿を、虫屋はただ下で見上げるだけであった。二十分程石を投げては綱を手にして待ったが、首と目が疲れて来たので諦めてまた登りはじめる。

巾着に落ちて来るヤマイチヂクの奥を食べながら峠を越え、新道を下りて田尻海岸へ出た。ここでは昨日と同じように、また昨年と同じように、タテハモドキの採集と、松の木陰の休息である。水筒を傾ける時の気持もまた格別。私と木村君は、ソテツ採集にかかった。例の天然記念物である。悪いとは知りながらやめられないのが生物部の悲しさであらうか。ギザギザの針の葉をよけながら、根もとの小さな株をもぎ取って胴らんの中に入れるのである。二人が亜熱帯の中で奮闘している時牛糞を見ていた酒巻の叫び声が聞えた。“ゴボンダイコクがとれた！” 昨年来て、時季違いだから取れないだろうと諦めていただけに、意外さも加わり、声のした方へ行って見た。

さあ、それから牛糞あそびが始まった。そこに居ると云う確信があれば不思議にとれるものである。三人で、6頭採集した。

牛糞をうの目たかの目で搜し、見つけるや否やそれに飛びついて行く虫屋達の姿を、遠くから見れば(近くから見ても同じだが)さぞかし、アンロマンチストに思われたに違いない。

一般に、詩人は美に対する感受性が強ければ強い程、それだけ醜に対する嫌悪も激しいものである。この原則を虫屋達にあてはめて見るならば、彼等は特殊な詩人と云えるであらうか。何故なら、虫屋はあの牛糞に対して何の汚さも感じていないのであるから。(キドッテルネ。どう見ても詩人と云う顔じやないのに！)

牛糞を後にして、海岸を進む。草本を叩いてカメノコ模様のハムシを採集。田尻海岸を尽きて、岬に行く峠にかかった。叩網をすると、種々の虫が落ちて来る。全行程中、全も魅力のある採集場である。

ワタカミキリ、アトモンチビカミキリ等は相変わらずよく落ちて来る。願念のセシウム、ユアサヒメも採集できた。昨日とれた同じ場所で、珍品シモフリヒゲナガをまた採集した。もつさりした姿が倉高生の感じとよく似ている。親近感を覚えながら管ビンに入れた。

暑い日ざしを受けてまぶしいばかりの叩網を持って、その白い布の上に珍品を落さんと、虫屋は思う存分木刀をふりかざす。流れる汗もかわいてしまった頬を赤くほてらせながら、このようにして採集を続けた。

長い山道を登りつめて、峠に立った時、思わず、歎息をもらした。視界がかつ然と開け、眼下にぐっと突き出た岬の緑の島の上に、白くぽつんと灯台があり、その下の絶壁には岩をはむ白い叢、そして洋々たる海が、広がっているのである。水平線にかすんで横たわっているのは種子島であらうか。価値千金のこの眺望をカメラにおさめようとした時、突然下の方から、白と朱色のツマベニチヨウが現われ、目の前を通りすぎて、たちまち上方へ飛び去ってしまった。網さえ手にとる事もできず、しばらくは、ただ茫然とするばかりであった。

坂道を下り、三十分程で岬の先端に着く。ここでは昨日と同じように、ボタンボウフウ花よでのモモゴト及びコミドリトラの採集である。

昼食後もしばらくそれを続け、道をひき返して、岬神社へ行って見た。ソラツヤビロウがラッ蒼と茂り、佐多の風景中、最も熱帯らしい所である。役のある参道には両側からソテツが覆いかぶさるようになつて、丁度トンネルのようである。ここでは別段収穫もなく、帰途についた。

叩網の回数も減り、時間的關係もあって収穫は少い。峠の道で、粗朶の下を歩行中

のヒゲナガヒメルリを採集し、少し悦に入る。酒巻君は、枯枝で、またまたアヤマムスジをおさえた。

新道をすぎて田尻海岸へ出る。もう昨日のトラックに乗る気はしなかった。海岸の側の道はトボトボ歩いた。例の松の場所で、またタテハモドキをネットに入れた。日ざしは既に弱くなり、吹く風に涼しさを感じながら叩網を続けた。落ちて来るものうち、目ぼしいものと云えば、アヤマナビロタマぐらいであらうか、大した収獲もなく、旧道の峠にかかり、そのまま峠を越えた。下りの道も同じだった。叩網には、極くわずかしが落ちて来なかった。佐多での採集も次第に最終に近づいて、皆は疲れ気味であった。ピロウの茂る山道を淡々と下りて行った。

大泊海岸に出た。イカリモンを捜す意欲は、もう無かった。奇せてはかえす波のたわむれと、夕暮れに灰色がかった海とを見ながら、渚を歩くのは快いものである。人影の無い夏の夕の砂浜は、波の音ばかりが聞える静けさだった。そして次は、牛の居る砂浜である。あちこちに砂浴する黒牛が見えてくると、もう公民館である。この日も七時頃帰りついた。シダ採集に行った新谷君は、この日の採集が大成功だとあって、一人、気を吐いていた。晩飯の前に一泳ぎした。昨年と違って水泳パンツを持って来ていたので、これを活用する義務を感じたからである。湾の中程にある防波堤まで泳いだ。外海の水が驚く程冷たかった。

晩飯の後は、虫の整理である。疲れているせいかなかなかはかどらない。傍から見れば、ずいぶんどうに思えるだろうが、珍品を一つ一つ手にとって眺めるのは、またとない楽しみの一つである。整理が全て終って床に着いたのは、12時過ぎだった。

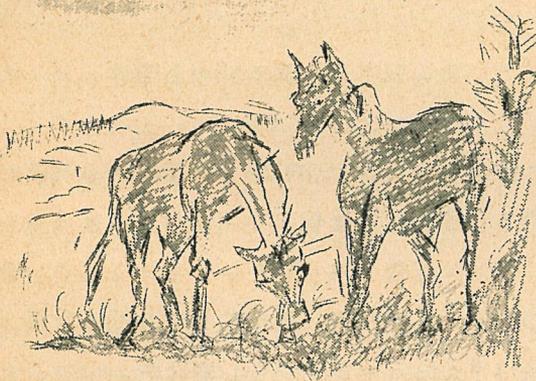
7月27日、晴

あけやらぬ空に鶉の声が響いた時、起床を余儀なくされた。蚊帳をたたみ、荷物をまとめ、手早く朝食をすませた。

伊座敷発7:00のバスに乗るために、昨日交渉したオート三輪で行く事になっていた。世話になった土地の人に別れを告げ、朝雲の大泊に手を振って、一行は出発した。さわやかな朝の天気の中を、オート三輪はズンズン走ってゆく。この車のゆれ方は、一昨日のトラックに劣らず激しかった。最後尾にいた私などは、時にひどかった。あまりにゆれるので、腹の中で内臓が入れ違ひになっているのではないかと懸念される程だった。山間の道を三十分、フルスピードで走り続けた三輪車は、我々を伊座敷に降り落とし、どこかえ消えてしまった。

皆はグロッキー気味であったが、それでも店屋へかけつけ、赤いレイシの奥や、佐

多特有の植物等を、土産に買っていた。伊座敷からはバスである。左手に、錦江湾とそれを隔てて立つ美しい関閘壘を、前方には淡くかすむ桜島を見て、バスは三日前通った道を北上する。大根占でありて、鹿屋行きバスに乗り換えて、また一路北上を続けた。行くに従って、両側に田畑が開け、辺境から遠ざかる感じがする。空に航空隊の練習機が二つ三つ飛び交っているのが見えて来るとやがて鹿屋である。鹿屋でまたバスを乗り換え、大隅半島を蕪切り志布志に着く。志布志からは汽車に乗り、夜青き有明湾に沿って、串間まで。串間の駅で降りて、都井岬行きのバスに乗り込んだ。(ああ、やっと都井の名が出て来た。こんなつきはぎだらけのスケジュールを、いったい誰がたてたのかと言いたくなるヨ)。



1時間半程バスにゆられていて、やがて馬が見えて来る。これが畑の中に居るのなら大した事は無いのだが、南国の岬に住む野馬馬となると話が違ってくる。バカな観光客は、密から身を築り出して、もったいない程、カメラのシャッターを切る。運転手も気をきかして、馬が現われるとわざわざバスを止めていた。

岬の頂上にある灯台の前でバスを降りた。茶店で例の大型オニギリを中食がわりに食べ、灯台に登った。真夏の太陽に照らされて、まぶしいように白い建物である。東洋一とか、種子島まで光が届くとか、説明の人が言っていたが、別段興味もなく、もっぱら外側のひさしを見上げて、虫捜しをした。夜間、灯火を慕って来にのだらう。オゾウムシやノコギリカミキリ、ゴマフカミキリ等、かなり多くの収穫があった。

大いに気を良くして灯台を出、その後、山道を下りながら、叩網に没頭した。熱心さの割に、落ちて来るものは少く、小型のゾウムシやハムシ程度、カミキリの類ではワタカミキリが一頭とれただけであった。

山を下りを小さな原で、馬糞をあさり、小型のコメツキを一頭採集。時間が無いので、ずんずん進んで、岬神社へ行った。この神社は数十メートルの断崖の中頃にあり、正面に青々と広がる太平洋を見下して、なかなかの壮観であった。石段を下りて、ソテツ林に行った。ここソテツも天然記念物に指定されていて、田尻海岸のそれと劣らず、南国の情緒をたたえていた。ソテツ林を後に山道を登った。所々にタマシダを

見かける。叩網は相交らず貧弱な収獲しかもたらさなかった。

うす暗い林の中で、時おり馬に出会った。都井ならでの幻想的な光景である。少し急ぎ足で山道を登り、ドライブウェイに出て、牧水の歌碑のある場所に行った。宮崎県が生んだ漂泊の歌人、若山牧水が、こんな所まで来て、変な歌を作ったらしい。

日向の国 都井の岬の

青潮に入りゆく端に 一人海見る

こんな文字が、平凡な石の上に刻まれ、芝生の上にポツンと立っていた。近くの茶店でパッションフルーツを買った。人も知るトケイソウの奥である。これを売る風景がまたのどかなもので、茶店の横に植えられたトケイソウから、なっている奥をとって、一個五円で袋の中に入れてくれる。これをミキサーにかけて、シェースにするとうまい。(実験済)

日が、西に傾いて来た。旅も終りに近づいた。牧水の歌碑に別れを告げ、バスに乗り、都井岬を後にした。

バスにゆられて串間まで戻り、そこで夕食をとり、19時35分発都城行の汽車に乗り換えた。西都城でこの汽車を降り、鹿児島から来た、日豊線より門司行、鈍急に乗り換えた。乗り継ぎを車ねた今度の旅程も、これが最後の乗り換えだ。もうこれで、黙っていても明日の朝は小倉に着くのである。汽車の中では、熱中的な四日間の採集の疲れが出たのか、あまり騒ぐ事もなく、皆はすぐにうつらうつらし始めた。

窓の外を見ると、明るい月影に照らされて、田畑や電柱が流れるように過ぎ去って行く。ガタゴトと云う快い規則的な振動に、体をもたせかけて、その景色を眺めながら、今度の旅行の事を、ふり返ってみた。

満月の下を、汽車は一人走っている。頭に浮かぶ事柄は、丁度無気力な視力の前に変る窓の外の景色のように、次々と現われ、そして消えて行った——計画するのは難しい。しかし、実施される時は少しばかりあっけない。そして終わった後、苦痛は全く無く、ただ楽しい思い出ばかり-----。

(終)

ゴクロウデシタ

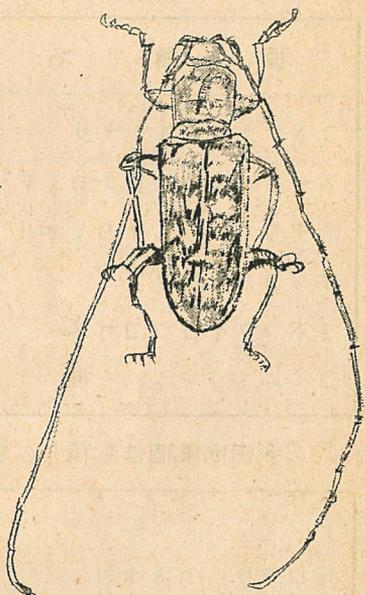
佐多岬の昆虫

昆虫班

3年 田中丸邦雄
2年 酒巻正昭
1年 大面 忠士

—— 二ヶ年に亘る佐多岬昆虫採集旅行のまとめ ——

古くからツチダゼミくオオシマゼミの地方型といわれる)の産地として知られ、近年にはツマベニチョウの名によって、一躍有名になった佐多岬は、南方系昆虫の本土上陸作戦に於ける根城のような所であり、ツマベニチョウ、タテハモドキ、アマミウラナミシジミ、ムツボシシロカミキリ、ケナガカミキリ、シモフリナガヒゲカミキリ、リュウキュウルリボシカミキリ、ニホンナガボソタマムシ、その外多くの南方系昆虫類の分布のほぼ北限にあたる。佐多岬は、本土最南端に位置し、南の島から最も近い距離にあることも、さる事ながら、そこに開発の遅れた原始林が存在している事も要因する。当地は植物相が大変豊富で、ツマベニチョウの食樹であるギョボク、ムツボシシロカミキリの食樹であるアコウ等の南方系植物も少なくない。つまり本岬は、食樹その他の条件が、外の何所よりも優れており、南国に良く似た環境を呈しているのである。それは、“九州の台湾”と稱せられている事からも裏づけられる。この“九州の台湾”と称せられているのは、大泊〜岬間であって、ほとんどの珍種はここに棲息しており、私達が二ヶ年の採集を行った所も仍ちこの間である。距離にして、約4 km位しかない。



シモフリナガヒゲカミキリ

さて、両年に亘って行われた採集にあたって実感した事を記そう。

第一に、各々種類によって、採集される場所が、かなり整然と限定され、そこに於ては同一種類が少なくないということである。たとえば、タテハモドキは、大泊海岸と、田尻海岸の、ハマゴウの花上や水をまりに集まる。イカリモンハンミョウは大泊海岸の旧道の入口の砂浜に群集する。フタオビミドリトラカミキリ、コムドリトラカミキリ、ニホンモモブトコバネカミキリ、ホソコハナムグリは岬突端のボタンボウフ

ウの花上に集まる。といったふうである。しかし、例外もあり、サツマゴキブリ等は、どこにでもいる。

第二に、一般に同種類の個体数の変化が甚だしく、又採集した種類数は、今年は多少前年に劣るものと思われる。ことに前年採集されたリュウキュウリボシカミキリ、キンイロナガタマムシ、その他のタマムシ類等の美麗種がさっぱりで、どちらかといえは暗い色の淡い種類が多かった。これは、参加者が両年各4名で、採集ルートがだいたい同じく今回は、新道での採集は行われなかったとて、季節、時刻、期間、天候(炎天)の条件も全くといえる程、一致していた事を記さねばならない。ただし、腕の方は多少の差があったかもしれないが、これは大して影響していないと確信する。以上の実例を下に表覧した。

今回採集個体数増加の著しいもの

種 類 名	1960 (7月23日~24日)	1961 (7月25日~26日)
コミドリトラカミキリ	4	10
フタオビミドリトラカミキリ	2	6
シモフリナガヒゲカミキリ	2	9
ホソコハナムグリ	1	7
ゴホンダイコクコガネ	0	5
ゴミムシダマシの一種	0	9

今回採集個体数減少の著しいもの

アマミウラナミシジミ	4	0
ガロアケシカミキリ	4	0
コゲチヤサビカミキリ	7	2
クロタマムシ	26	0
イカリモンハンミョウ	25	6

この外、ヨツスジトラカミキリも前回より減った種類であるが、捕獲頭数が同じである為、表中に記さなかった。又、上述の様な変化は何故か分らないが、たゞゴホンダイコクに於ては、去年にない手ごろな牛糞(一日経たくらいで、表面が固く、中の柔らかいもの)が多かった事、クロタマムシでは、松の倒木が見あたらなかった事が考察される。又、昨年ほど薪材がなかった事

も、ある種(カミキリ類、その他)に於ては、原因となっている様だ。しかし、イカリモンハンミョウの場合などは、全く原因がつかめず、年毎に於ける、周期的発生が有るのかもしれないと思つたが、あるいは、その日に限って少なく、実際には、もっと多くいたのかもしれない。そうだとすると、原因がますます分らなくなつて、結局

からずじまいにならざるをえない。生態の面からも考察する必要がある。又、捕獲種類について下に記す。

前回採れて、今回採集されなかったもの。

リュウキュウルリボシカミキリ、ツシマムナクボカミキリ、ガロアケシカミキリ、ヤハズカミキリ、アマミウラナミシジミ、クロタマムシ、キンイロオガタマムシ、ムネアカチビナガボソタマムシ、シロヘリハンミョウ

今回採れて、前回採集されなかったもの。

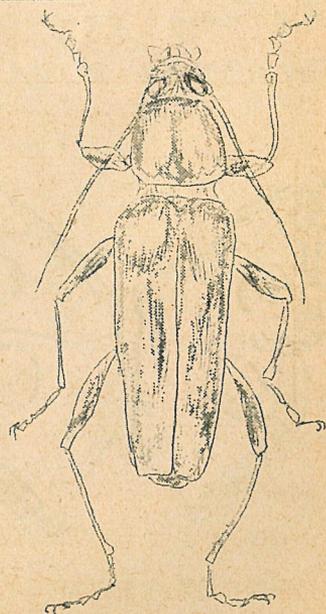
ムツボシシロカミキリ、ケナガカミキリ、ヒメナガヒメリリカミキリ、シロスジドウボリカミキリ、ゴホンダイコクコガネ

両年通じて変わらない、特記すべき種類、

ツマベニチョウ、タテハモドキ、オビレカミキリ、ワタカミキリ、アトモンチビカミキリ、ニホンモモブトコバネカミキリ、アヤムネスジタマムシ、サツマゴキブリ

第三に、前回試みなかった新しい採集法が実行でき、又、思いがけない種類が、当地で採集できた事は大きな成果であると思ふこと。半面、下調べに於いて、まだ不備な点のあった事が痛感されたこと。初めに、ムツボシシロカミキリのアコウの木に於ける採集や、ハマゴウに於けるセレシウム（ヒメカミキリ類）の夜間採集などは、結果は芳しくなく、“期待がもてない事”が分ったことも一つの成果だったと思ふ。二番目に、キュウシュウチビトラカミキリの採集。これは前回の採集で捕えな種類で、原産地が福智山の、佐多岬未記録種であった。この成果は大きなものだ。しかし、屋久島にも消息するの

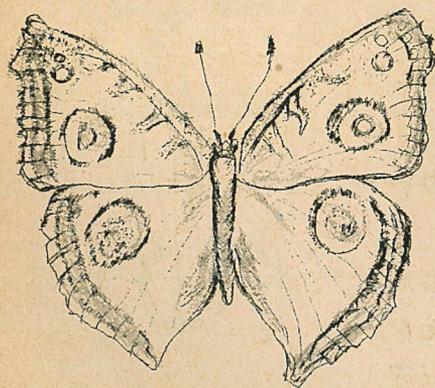
勿論珍稀な種類で、採集はおろか、目撃さえもできなかったものが少なくない。ツチダゼミ、ミナミヤンマ等がその例で、ツチダゼミなどは、その鳴声すら聞けなかった。もっと注意していたなら、あるいは聞けたかもしれない。残念である。



コミドリトラカミキリ

で、当然とはいかなくとも、考えられる事であらう。又、同年8月に、佐多岬峠と
いわれたサツマゴキブリが、福智山で一頭発見されたが、何か関連的に思われて、興
味がある。それから、アオノクマタケランが、アヤムネスジタマムシの食草ではない
か、という問題が、今回によって、また新しい反省を促す結果になった事も成果の一
つといえよう。つまり、前回採集された本種が、アオノクマタケランの葉上で採集さ
れた種類が多い為、てっきり食草ではないかと考えた。それが今回の採集のほとんど
すべてが、枯枝から得られたので、又新しい疑念が生まれたというわけだが、それ
にしても軽卒な考えは慎しみたい。(アオノクマタケランが食草でないとは、まだ言
きれない。可能性はある。) それから下調べが不徹底であった事は、前回のアマミウ
ラナミシジミの採集の時に暴露した。本種の♂とウラナミシジミが大変酷似している
事に気づかなかったのである。つまり本種とアマミウラナミシジミの区別は、羽の真
中が水色でまわりが黒いのが本種で、そうでないのがウラナミシジミと決めてしま
っていたから、結局上述のような形態を呈す♀ばかりが採れ、♂が零匹となったとい
うわけである。

第四に、採集の種類に対する偏見が著しかったこと。即ちカミキリ、タマムシ、チ
ョウ類などに片寄りすぎたのだ。なにぶん私達は「あらゆる昆虫も手あたり次第に毒
瓶に放り込め。」という、標語めかしき言をはいていただけに、遺憾に思う。そまつ
にされた昆虫の中にも、珍奇稀なる大物は少なくない。当地には、足の踏場に困るほ
ど群棲するサツマゴキブリも、わずかに5、6頭採集されたにすぎない。どうも専門
方面に片寄る事は、どうにもならない様に思える。



タテハモドキ

以上が主な感想及びまとめである。
もう少し述べさせていただく。本岬は今、観光
の目的で、岬突端のジヤングル地帯も、かなり
開発されていると思う。私は文明の波に押され
て衰退していく佐多の虫達に同情している。だ
から、この採集旅行が、単なる遊戯的なものに
終らず、想像以上の成果をあげる事ができた
事を喜んでいる。佐多岬は、サツマイモの害虫
であるアリモドキゾウムシの本土上陸地点の予
測場所などによって、以後も注目の的となるこ
とだろう。最後に一言、ツマベニチョウを求め

る者は、当地より山川方面へ行かれたし。

昭和35年 参加者	
田中丸邦雄	中野国政
武智昭一	酒巻正昭

昭和36年 参加者	
	大面忠士
田中丸邦雄	酒巻正昭

佐多岬昆虫目録

ここに記載したのは今年の採集品なので、昨年のユーカリ9号の目録を参照にされたく思う。ただし、昨年は蝶及び甲虫類のみなので、カメムシ類などは比較できない。又、今回学名並びに採集日を省略した。それから都井岬の採集品は、あまりにも乏しすぎたので、これも省略させていただきます。

チョウ類

1. アオスジアゲハ	2 ex
2. ナミアゲハ	3 ex
3. ナガサキアゲハ	1 ex
4. モンキアゲハ	1 ex
5. キチョウ	1 ex
6. ツマベチョウ	1 ex
7. ヒメアカタテハ	1 ex
8. タテハモドキ	9 ex
9. メスグロヒョウモン	2 ex
10. ウスイロユノマチョウ	1 ex

カミキリムシ科

1. ウスモンアヤカミキリ	2 ex
2. カノコサビカミキリ	2 ex
3. ツシمامナクボカミキリ	1 ex
4. ワモンサビカミキリ	1 ex

5. ヒゲナガヒメルリカミキリ	1 ex
6. シモフリナガヒゲカミキリ	9 ex
7. セレシウム類	3 ex
8. コゲチャサビカミキリ	2 ex
9. ムツボシシロカミキリ	1 ex
10. オビレカミキリ	1 ex
11. イボタサビカミキリ	2 ex
12. クワカミキリ	3 ex
13. ワタカミキリ	11 ex
14. アトモンチビカミキリ	3 ex
15. ニホンモモブトコバネカミキリ	13 ex
16. トゲヒゲトビイロカミキリ	5 ex
17. ビロウドカミキリ	1 ex
18. ニセビロウドカミキリ	2 ex
19. ケナガカミキリ	1 ex
20. エグリトラカミキリ	2 ex
21. ヨスジトラカミキリ	13 ex

22.	コミドリトラカミキリ	10 ex
23.	フタオビミドリトラカミキリ	6 ex
24.	カタジロゴマフカミキリ	1 ex
25.	タイワンメダカカミキリ	1 ex
26.	シロスジドウボソカミキリ	1 ex

タマムシ科

1.	タマムシ	5 ex
2.	ウバタマ	1 ex
3.	クズノチビタマムシ	1 ex
4.	アヤムサビロタマムシ	1 ex
5.	アヤムネスジタマムシ	3 ex

コガネムシ科

1.	ゴホンダイコクコガネ	5 ex
2.	カドマルエンマコガネ	3 ex
3.	不 明	12 ex
4.	不 明	2 ex
5.	カナブン	6 ex
6.	アオヒメハナムグリ	3 ex
7.	ツヤコガネ	6 ex
8.	マメコガネ	4 ex
9.	ホソコハナムグリ	7 ex
10.	チャイロコガネ	6 ex
11.	セマダラコガネ	3 ex
12.	クロカナブン	1 ex
13.	アオドウガネ	3 ex
14.	シロテンハナムグリ	4 ex
15.	オオコフキコガネ	1 ex

クワガタムシ科

1.	コクワガタ	1 ex
2.	ヒラタクワガタ	1 ex
3.	ノコギリクワガタ	1 ex

ハンミョウ科

1.	イカリモンハンミョウ
----	------------

ナナフシムシ科

1.	ナナフシ	1 ex
2.	トゲナナフシ	1 ex
3.	ナナフシの不明種	3 ex

テントウムシ科

1.	アミダテントウ	15 ex
2.	ベニハリテントウ	2 ex
3.	オオアカボシテントウ	2 ex
4.	ナミテントウ	3 ex
5.	ニジュウヤホシテントウ	2 ex

ハムシ科

1.	アトボシハムシ	2 ex
2.	ヤマイモハムシ	1 ex
3.	クビアオハムシ	3 ex
4.	クロウリハムシ	4 ex
5.	アカクビナガハムシ	3 ex
6.	コカミナリハムシ	6 ex
7.	ニレハムシ	3 ex
8.	ヒメキバネサルハムシ	4 ex
9.	アカガネサルハムシ	1 ex

ゴミムシ科

- | | |
|-------------------|------|
| 1. オオナガゴミムシ | 1 ex |
| 2. キガシラアオアトキリゴミムシ | 2 ex |
| 3. ジュウジツアトキリゴミムシ | 2 ex |
| 4. ベーツヒラタゴミムシ | 1 ex |
| 5. イクビモリヒラタゴミムシ | 3 ex |
| 6. クロケブカゴミムシ | 4 ex |

ゴミムシダマシ科

- | | |
|----------------|------|
| 1. キマワリ | 1 ex |
| 2. シワナガキマワリ | 2 ex |
| 3. ルリスジキマワリモドキ | 1 ex |
| 4. ホソクビキマワリ | 1 ex |
| 5. ズビロキマワリモドキ | 2 ex |
| 6. カクスナゴミムシダマシ | 1 ex |
| 7. ゴミムシダマシの不明種 | 9 ex |
| 8. " 不明種 | 3 ex |
| 9. " 不明種 | 1 ex |

コメツキムシ科 不明3種 6 ex

コメツキモドキ科不明2種 2 ex

オトシブミ科

- | | |
|--------------|------|
| 1. ブドウチョッキリ | 2 ex |
| 2. ヒメクロオトシブミ | 1 ex |

カッコウムシ科

- | | |
|-----------------|------|
| 1. イガシラカッコウムシ | 2 ex |
| 2. ムナグロナガカッコウムシ | 1 ex |

キクイムシ科

- | | |
|--------------|------|
| 1. キクイムシの不明種 | 9 ex |
|--------------|------|

ゾウムシ科

- | | |
|-----------------|------|
| 1. シロコブゾウムシ | 6 ex |
| 2. シロホシセメゾウムシ | 1 ex |
| 3. ゾウムシの不明種 | 4 ex |
| 4. " 不明種 | 3 ex |
| 5. " 不明種 | 2 ex |
| 6. " 不明種 | 1 ex |
| 7. " 不明種 | 1 ex |
| 8. ヒゲナガゾウムシの不明種 | 2 ex |

カメムシ類

- | | |
|----------------|------|
| 1. アカスジカメムシ | 4 ex |
| 2. ツマキヘリカメムシ | 1 ex |
| 3. ヒョウタンナガカメムシ | 1 ex |
| 4. ホソヘリカメムシ | 1 ex |
| 5. マルシラホシカメムシ | 3 ex |
| 6. シマサシガメ | 4 ex |

ゴキブリ科

- | | |
|-------------|-------|
| 1. サツマゴキブリ | 11 ex |
| 2. オオゴキブリ | 1 ex |
| 3. チャバネゴキブリ | 1 ex |

佐多岬の植物



バナナの花

植物班 3年 新谷 雅 宏
2年 井上 浩 輔

昨年と今年、2回にわたった採集旅行の植物班における成果を発表してみたいと思います。羊歯約60種、羊歯以外の植物約100種の成果をおさめました。

佐多岬は九州本土最南端という位置で、かなり亜熱帯的であり、九州に住んで植物を研究する者にとって非常な魅力の地となっております。事実、かなり濃厚な熱帯ムードを感じ取ってきました。

第1回佐多岬採集旅行は、昨年の7月21日から7月26日までの5泊6日の日程で採集に行き、植物はキキョウラン・クワズイモ・ユモチシダ・タマシダ等珍しい植物が採集できました。

第2回佐多岬採集旅行は、今年の7月23日から7月29日までの日程でした。今年は昨年の経験を生かして、昨年採集することが出来なかった珍しい植物を重点的に調べあげ採集することに努力しました。

幸運にもハゴの太木見学のために立ち寄った舟木において羊歯は非常に調子よく採集でき、アツイタ・ヤリノホクリハラン・シンテンウラボシ・タマシダ等30種ほど採集でき、最初の日にしてすでに羊歯は予定の6割を採集できました。

さらに幸運は続き、大泊青年団の団長が植物に非常に興味をもっていらっしゃる方で、いろいろ話をしているうちにあくる日、つまり、25日に、昨年採集できなかったサタソウの自生している所に案内してくれることになったことです。このサタソウは故郷野宿太郎博士がこの佐多岬で最初に発見された植物であり、非常に珍しい種類があります。サタソウが自生している所は早崎の付近であり、昨年採集して回った所とは全く反対の方向になります。又、外ノ浦でガジュマルの大木を見、途中サクララン・ガンバイヒルガオ・キキョウラン・アオノクマタケラン・クワズイモも合わせて、採集することが出来ました。

次の日、26日は植物班は昆虫班と共に岬へ、自分はオオタウタリを採集するために一人山にはいり込みました。その時偶然にも自生のハゴを採集することが出来まし

た。

次に2回にわたる採集旅行の採集品をあげてみます。

植 物

・「サタソウ」

多年草・多肉質であり今年早崎海岸の急斜面のかなり湿気の多い所で採集しました。まわりにアオノクマタケラン・クワズイモが密生し、その根もと付近に細々と白い穂状の花をつけていました。このサタソウは改牧野富太郎博士が当地で発見し、命名した珍しい植物であります。事実専門家が土地の人でないかぎりこれを発見することができないのではないかと思います。

・「クワズイモ」

東インド地方に主に自生する多年生の草本で、茎の高さは0.8~0.9 m位である。もともとセイロンの自生種であります。古くから東南アジアからタヒチまでの間に移植されて栽培され野生化したものであります。当地のクワズイモも移植され野生化したものと思われれます。根茎は猛毒性があり、食用するためには相当の労力を要し、稲の栽培が盛んでなかった時代に主食の一部にあてたのだらうと思われれます。澱粉含量は3%以下であります。

・「アオノクマタケラン」

暖地に自生する多年性草本で高さ1 m内外、夏に白い花をつける。サタソウを採集した場所と同じ所で採集。これも佐多には数多く見られる植物で、観賞用として栽培し、又葉を乾燥させて縄を作る。土地の人はこれでもちを足みふかして食べるとうる。

・「ツメレンゲ」

多くは山地に自生する常緑草本で岩上に生苔する。葉は多肉質で夏に白い花をつける。

・「サクララン」

東印度原産の多年草つる性の草本で観賞用として各地に栽培されている。葉は多肉質で夏に小さな花をつけ色は淡紅色で少しサクラ色を帯びているのでこの名がある。観賞用とするには寒気を非常に恐れるので、冬は温室で育てねばならない。

羊 歯

・「ハゴ」

常緑性で木性羊歯の一種で不定根よりなっている。幹は直径50 cm に達し高さは

2~9 mで大きな葉は2 mをこし、幹に著しいトゲがあります。外観はシュロの木によく似ています。分布は伊豆諸島・宮崎県南部に産し、平地から低山地の湿度の高い林中に生じます。舟木にあったハゴは高さ3 m、幹の太さ30 cm位のが三本あり、そのあたり一面にタマシダのすばらしい群生が見られました。又幹は輪切りにして植木鉢の代用等に使用しています。

・「オオタニワタリ」

常緑性。琉球・台湾や九州南部の岩石及び大樹上に多く着生する大型の羊歯で葉を広げた状態は鳥の巣にたとえられています。26日に私一人で山へ分け入り、太い老木の途中に細々と自生しているのをよじ登って採集しました。谷を渡るように太い幹の途中に生えているのでこの名前があるそうです。本種は観賞用として出回っており、近年自生種は非常に減ってよほど山深く入らないと採集できません。

・「タマシダ」

常緑性で地上又は樹上に着生、群生し、本邦中部以南の海岸に近い暖地に多く見られます。乾燥地に生ずるため根の一部に球状の塊を持ち貯水の用をなしており、生殖とは無関係です。舟木ではハゴの回りに長さ1 m、幅10 cmもあるみごとな本種の群生が見られました。本種も葉の縁が美しいために観賞用として広く出回っています。

・「アツイタ」

常緑性の羊歯で八丈島・紀伊半島・高知県南部・鹿児島南部の山中に産し、林中のコケにおおわれた岩石や樹幹に着生します。

・「サツマシダ」

常緑性の羊歯で根茎は細い鱗片が密生しています。大きなものは長さ1 mに達する。鹿児島県にはまれに産し、やや乾燥した山林中に生ずる。昨年田尻にて採集した。

・「コモチシダ」

常緑性の羊歯で根茎は太く短かく肉質である。葉の表面に芽が出未、落ちて新しい羊歯となる。コモチシダは小倉市附近でも見かけるかなり普通の羊歯であるが、北九州のは芽が出ないようであります。

・「ヤリノホクリハラン」

常緑性羊歯で、林中の地上又は岩石上に生じ、九州最南部の山地に産し、北九州では見られません。琉球・台湾・中国南部・インドシナに分布しており、これは舟木において採集しました。

・「シンテンウラボシ」

常緑性羊歯で、下部に数個の側羽片を不規則に突出する。北九州南部の山地に産する。舟木にて採集しました。

・「ハマホラシノブ」

常緑性、伊豆以西の本州の太平洋岸側、四国・九州の海岸に住じ、日の当る崖に群生する。田尻海岸にて採集。

昨年、今年と二回にわたった採集旅行で感じたことは、佐多には非常にトゲのある植物が多いことでありましょう。ヘゴ・ネムノキ等採集する時は長袖でないと困難です。それから多肉質の植物が多いことです。ハマホラシノブ・ツメレンゲ・サタソウ・サクララン等はそうです。

以上が我々植物部植物班の二年間の佐多旅行における成果であります。この紙上に書き表わすことのできない私達の心の成果は、この採集品目以上の成績をもって終った事を確かにし、過ぎし日の採集記録と致します。

昭和35年 参加者

奥村 晃久、新谷 雅宏
 奈良坂 絏一、野村 茂治
 井上 浩輔

昭和36年 参加者

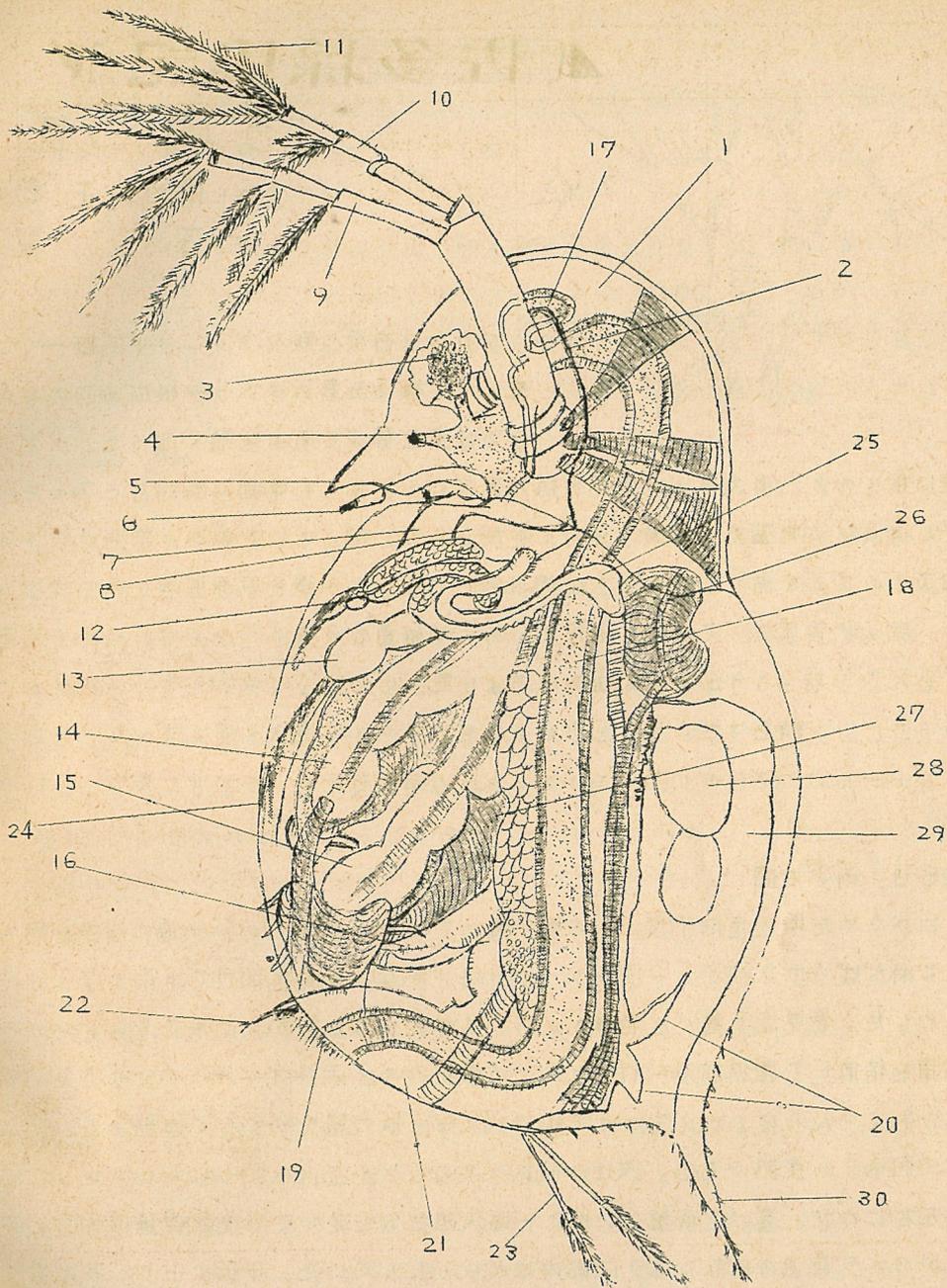
新谷 雅宏

次に36年度採集分の目録を載せておきます。

目 録

植物	和 名	科 名	学 名
1	タヌキマメ	マメ	<i>Crotalaria sessiliflora</i>
2	キケマン	ケシ	<i>Corydalis palatycarpa Makino</i>
3	フジウツギ	フジウツギ	<i>Buddleia japonica</i>
4	ヤブラン	ユリ	<i>Liriope gramanifolia.</i>
5	センダン	センダン	<i>Melia Azedarach, Var. japonica.</i>
6	ヒメイタビカズラ	クワ	<i>Ficus Fkumbergii.</i>
7	アオノクマタケラン	ミョウガ	<i>Alpinia chinensis</i>
8	キキョウラン	ユリ	<i>Dianella ensifolia Red.</i>

植物	和名	科名	学名
9	サタソウ	コソウ	<i>Peperomia japonica</i> Makino.
10	マオ	ジンマ	<i>Beechmeria nivea</i>
11	ソウジュ	マメ	<i>Acasia Ricbit</i>
12	ハマナタマメ	マメ	<i>Canavallia lineata</i>
13	イカダカズラ	オシロイバナ	<i>Bougainvillea spectabilis</i>
14	ネムノキ	マメ	<i>Abbazia pubibrassin</i>
15	イタビカズラ	クワ	<i>Ficus foveolata</i>
16	メドハギ	マメ	<i>Lespedeza sericea</i>
17	ハマゲルマ	キク	<i>Wedelia prostrata</i>
18	コンニャク		<i>Amorphophalus Konjac</i>
シダ			
1	アツイタ	オシダ	<i>Elaphoglossum yoshinagae</i> (Yatabe) Makino
2	ホシダ	ヤブソテツ	<i>Cyclosorus oculinatus</i> (Horitt) Nakai
3	オオタニウタリ	チャセンシダ	<i>Asplenium antiquum</i> Makino
4	ヒトツバ	ウラボシ	<i>Pyrrhosia lingus</i> (Thunb) Farwell
5	シンテンウラボシ	ウラボシ	<i>Colysis skintenensis</i> (Hayata) Ito
6	ハラシダ	オシダ	<i>Diplazum subsinuatum</i> (Wall) Tagawa
7	オオイワヒトデ	ウラボシ	<i>Colysis pothifolia</i> (Don) Pr.
8	ヤリノホクリハラン	ウラボシ	<i>Colysis wrightii</i> (Hook) Ching
9	クミノハシダ	ホシダ	<i>Cyclosorus subpubescens</i> (B. P.) Ching
10	ザジゲジシダ	オシダ	<i>Phegopteris decursive pinnata</i> (Van Hall) Fee
11	ヤブソテツ	オシダ	<i>Chromolaena Fortunei</i> J. Sm.
12	クミノハシダ	ホシダ	<i>Cyclosorus subpubescens</i> (B. P.) Ching

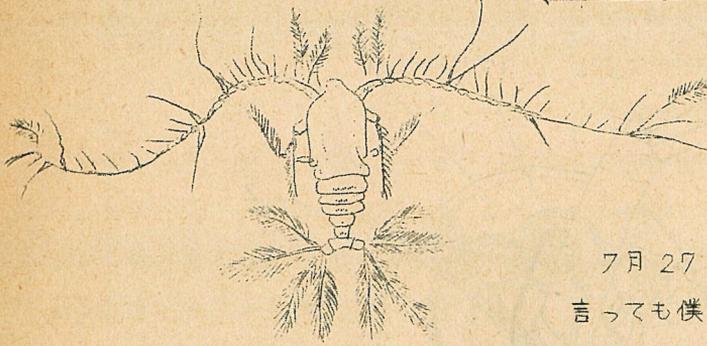


1. 頭匣 2. 殻弧 3. 複眼 4. 単眼 5. 吻 6. 第一触角 7. 上唇 8. 大顎
 9. 第一触角の内枝 10. 第一触角の外枝 11. 游泳剛毛 12~16. 第1~第5肢
 17. 前腸盲のう 18. 中腸 19. 肛門 20. 後体部突起 21. 後腹部 22. 尾爪
 23. 尾刺 24. 殻の腸縁 25. 殻線 26. 心臓 27. 卵巢 28. 産出せる夏卵 29. 育房
 30. 殻刺

▲佐多採集記▼

プランクトン班

2年 伊藤正彦
1年 森 聖



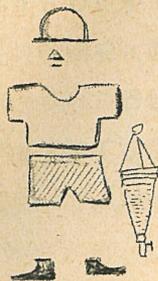
7月 27日夜、我々プランクトン班一（と言っても僕と森君の二人）一は佐多での多大なる収獲を夢みて南小倉駅へ向った。小倉駅

で国電に乗りかえ、車内で土井さんに初対面する。どちらも見知らぬ同志であったが土井さんは我々の先輩で、今度の旅行に参加されると聞いていたので、あたかも十年采の旧友？のごとく話しているうちに門司港につく。もう既に高原先生、太田先生をはじめ、殆んど皆集まっていた。皆遠足に行く幼稚園の子供のごとくはしゃいで汽車に乗り込んで9時40分出発。太田先生方より差し入れのジュースetc.をのんでさわいでいるうちに12時をすぎ、皆うとうとビシだしてやがて寝入ってしまった。ただ汽車だけがレールのつぎ目のかなでるリズムミカルな音を夜空にひびかせて南下していった。

7月 28日、雨のち晴

朝、目がさめた頃汽車は丁度出水の駅に着いていた。朝早いせいか暗いなあと思っていたら雨がぱらつき初め、一同をがっかりさせたが、鹿児島附近で小雨になったのでほっとした。鹿児島に着くと酒巻さんのお父さんが駅にむかえに来ておられたので、会社の車を借用して鹿児島港へ行った。その頃になると雨はすっかりやんでいった。酒巻さんのお父さんらにわかれをつけ船はハスキーな汽笛をのこして出航した。これから5時間余りの長旅である。僕達の前途を祝福してか空はみごとに晴れわたり、船は上下左右にゆれ、喜びと希望をのせて一路大根占へと走っていた。僕達に用意してくれたかのような気分になるように船内はがらんとしていた。甲板に出て、みんなで校歌などをどなって、大いに気勢を上げた。そうこうしているうちに船は大根占へ着いた。そこからバスに乗りヘゴを観るために舟木まで行った。ここまでするとまったく南国である。道々にバナナの林や発育のよい水田の中の雑草などが見られた。舟木ではプランクトン班は、するこじがないので伊藤君と二人で2時間余り休憩をし、4時頃ふたたびバスに乗り、大泊へと向った。大泊へは6時頃ついた。ここが目的地で、

ある。泊まるのは公民館である。荷物を放り出して、すぐにネットを引くと、心快いほどたくさんプランクトンが入っていた。すぐに顕微鏡でのぞいてみると、内湾性の撓脚類が数多く見うけられた。(森)



7月29日、朝6時半頃目をさますと、横に寝ていたはずの森君がいなくて、さては彼、キジかカモでも打ちに行つたかと思つてみると、堤防の方から倉校特製のトウマイブクロの運動パンツにランニング姿で、プランクトンネットを片手にニコニコと帰ってくる。「シマッタ、彼一人で採集に行つてたのだ」。「スマナイ」、と心でさげむ、口では「オイ早く起きすぎるゾ」と言いながら試験管をうけとって、光にすかして見ると、いろいろ無数の半透明のつぶが光をうけてキラキラチラチラ、輝きながら右往左往している。水が澄んでいるので、一層きれいな見える。いつであったか野村君が日明の海岸から採集してきた時、やはり試験管ですかして見ると、海目はコンソメスープのごとくプランクトンはその中のコンショウの粒の様に思ひ出したのを思ひ出して、くもともその時は腹がすいていたのでそう見えたのかもしれない。今さらの様に海水の美しさに驚いた。朝食をすませて堤防の突端まで行って太平洋のしびきに当たると、何だか胸の内からこみあげてくる感動の様なものゝ息がつまりそうになる。堤防の先の方の岩に波が当たってしびきをあげている。あまりにも澄んだ空気のためにライトブルーの空と濃紺の海とがきちっと、水平線でおわかれていゝ。この濃紺の海の中に無数のプランクトンがうごめいていゝと思うと、無精に腹が立つ。なぜ腹が立つのだ？ それは僕にもよく解らない。しかし一生懸命ネットを引っぱってまわつても、その無数の中の何千億分の一、否、何兆分、何百兆分の一もとれないと思つと、やはり腹が立つ事は確らしい。大泊での採集は早朝、十時、二時、四時、夕方の大体五回行ふ予定であつた。プランクトンは夕方から夜、早朝にかけて海面近くまで浮かんでくるので早朝、夕方の採集には最も期待をかけていた。しかし、昼間でもかなり収獲があつたのは、やはり黒潮の影響であろうか？「木きよければ魚すまず」といふことわざがあるが、ここは水が清いのに魚はウントコサ居る。堤防の上からながめただけでも、トラフグ、ハリセンボン、イカ、クロダイ、キス、それから土地の言葉を標準語に直すと、「エサを取る魚」とか言ふ珍妙な名前をもつた魚も、手に取る様に見える。特にこの「エサを取る……」は、体側に一本の鮮やかな線があつて、それが光をうけるとギラギラ光つて気味が悪い程である。フ

グの一種だそうで、クロダイをつっていると、かならずこれが餌のフナムシをとってしまふ。浜辺を歩いているヒカの子供(体長1.5 cm位)やシヤコの子(体長2 cm位)がいる。何か餌になるプランクトンがこの付近には豊富なのだろうか? この付近の人もおっとりとしているので自然がまだあらされていないのが何よりもすばらしい。毛布に大事に包んでいった顕微鏡で、プランクトンを調べる。橈脚類が圧倒的に多い。名前の不明なものがでてきても、参考文献が保育社のプランクトン図鑑だけなので調べようがなく、参考文献の必要性を痛感した。森君はあまりにも痛感しすぎて、午後腰痛をおこしてしまった。おかげで彼は、翌日一杯寝たっきりであった。(伊藤)

7月29日

朝6時に起床して、外を見ると絶好の日和である。しめたと思ひ、伊藤君を起こそうと思つて体をゆすつてみたが一向に目をさましやうにない。彼はまったく幸福といつた寝顔で寝ていたので、彼はそのままにして、ネットを持って出ていった。今日は一日中のプランクトンの量や、種類の変化などを調べようと思つたので、まず6時から活動を開始したのである。防波堤を境にして外海と、内湾とに分けるつもりで行つてみたら、浪は荒々しくネットを引くことが出来なかつたので、内湾だけにした。定深1mで引くことにし、L字型で引いて廻つた。海は黒ずんで、なるほど黒潮だなと思つた。それから9時、12時、2時、4時と、ネットを引いた。どの試験管を見ても相当な量のプランクトンが入っている。肉眼では、種類を見分けることは出来なないが、運動の様子は良く分つた。ミミズみたいに動くのや、ノミが畳の上を飛び廻つてゐるようなのやら、さまざまである。今まで測定して来て、感じたことは(後日分かつたことですが)、なんととっても、動物性プランクトンでは、橈脚類が90%以上で、他はミジンコ類、貝類、放射虫などで、巻貝のベリジァ期、ウエの幼生などは、親と子とがはっきりと分つた。植物性では、硅藻類、鞭藻類のどちらも採集することが出来た。

4時までには採集したけれど、昼食をとつてすぐに、植物園まで歩いていったので、胃の調子が悪くなつていたので、とうとう急行列車となつた。それで、6時からの採集は中止した。ヒンだ災難である。(森)

30日、

起きるとすぐにネットをさげて防波堤まで行き、例のごとくL字型に引いて廻つたが、どうも気分がわるかつたので、すぐに引き上げて帰り、その日は、昼まで寝て、

昼から試験管の整理をした。その間、他の班員といっても伊藤君だけが、採集に活躍していた。佐多での採集は、この日で終った。全体として、なにか心残りが出てきた。今年のプランクトン班は装備も不十分で水素イオンや塩素含有量 etc. を調べられず、プランクトンに及ぼす環境の影響等も調べたかったのだが…。(森)

7月30日、朝起きると又もや森君の姿が見えない。飛び起きて、トレパンをはいて、堤防の方へ走る。朝の空気はどこでもすがすがしいものだが、ここの空気は特にすがすがしい。太陽はもう山の裏側では昇っているらしく、大泊をとりまく黒々とした山の稜線の附近だけが輝いている。堤防にフくと、彼がすこしきつそうにネットを引いている。今日は心でも「スマナイ」と言い、口でも「スマン、スマン」とあやまって、二人でネットを引く。昨日、外海がすこし荒れたせいかな、堤防の内側も少し溜まっている。荒れた潮にのって珍しいのが採集できればよいかと念じつつ、(後日調べてみると、この時の採集で偶然性のものが数種採集されていた。一念とは恐ろしいものである)採集する。昼間伝馬船を借りて、堤防の外に出ようと思ったが、昨日のなごりの荒浪でとられない。しかたがないので堤防の内をこいでネットを引く。ハリセンボンがユラユラリと泳いでいる。その泳ぎっぷりといい、姿といい、これはどう見ても魚とは思えない。まるでハリモグラが海に落ちて、水をしこたまのんだ様なかっこうだ。それでもつかまえようとすると、尾ビレをニ、三度強くバタつかせて、スイッと深みへ消えた。プランクトンは昆虫や植物とちがって採集してすぐには名前も解らないし、珍種かどうか解らない。もっともエチゼンクラゲやその他のクラゲ類、イセエビの幼生、矢虫 etc. は肉眼でも見えるので解るが。昆虫班や植物班が「珍種、珍種!」とさけびのを聞いて、「よしこちらも叫んでやろう」と考えて顕微鏡をのぞいても、相手が極小なのでなかなかそうはいかない。森君の腹具合も、午後には良くなる。今日の午後までに大体試験管に35本分採集し、ホルマリンを加えて保存する。夜の採集で5本採ったので、全部で試験管に40本分の採集をする。明日の朝は出発が早いので、おそらく採集できないだろう。2日間で40本採集できたのは、採集として成功なのか不成功なのか——それは帰って内容を調べてみなければ解らないが——2人で、しかも森君は腹痛をおさえてガンバってくれたのだから不成功と決めつけるわけにはいかない。出来れば、来年もう一年末く、それも班員を少なくとも3人、望むらくは4、5人つれて、もっと充実した採集をしたい etc. と考えて、夕暮れの海をながめていると「オーイめした!」。走って帰ると、ありがたや三日つ

づいたみそ汁(しかもそれが毎朝、毎晩なのである)がやつとさしみになってきた。かくて部員はひさしぶりに動物性蛋白質を腹におさめた。

次に、佐多岬に採集旅行した際、我々プランクトン班が大泊湾内で採集し、判明出来た分だけを記す。

場所 — 九州鹿児島県大隅半島佐多、大泊湾内。海流 — 黒潮である日本海流。
採集期 — 夏季、朝6時~夜6時頃まで。採集者 — 2人(以上)の条件である。海流が暖流のため全部暖海性又は亜熱帯性のどちらかである。種類及び発生数は、春秋を最大とするものであるため少種類少量であった。その類としては当然であろう橈脚目が多くあった。今度の採集に関しては1cm³に対する発生量、イオン濃度の測定はしなかった。実に幼稚な成果しか得られなかったが、分類したものを下に記す。

- 器具 ・ プランクトンネット、 ・ 広口ビン、 ・ 顕微鏡
・ 写真機(顕微鏡写真のため)、 ・ 試験管、 ・ スポイド、
・ スライドグラス、 ・ その他

○植物性

硅藻類 --- 黒潮性のみ。

- Chaetoceros atlanticus* (チートケロス・アトランチクス)
Eibonii
laciniatus (ラキ = オーサス)
distans (ディスタンス)
didymus (ディディムス)
Chromosphenia moniligen (モニリゲル)

藍藻類

- Trichodesmium Tiebautii* (チィバウチ)

鞭藻類

- Pyrocystis noctiluca* (ピロシス・イクテルカ)
熱帯外洋性 ----- 多。

以上この植物性プランクトンは倍率100~400で調べました。植物性プランクトンは動物性プランクトンのえさとなり、付着性と浮遊性とに区別出来ます。

○動物性

橈脚類

- Paracalanus parvus* (パラカラヌス・パルチブス) 大 多

Paracalanus	pawus		少 多
Acartiu	clausi	(カルチアクラウン)	stage III
Carycaeus	sp		
Oitona	plumifera	(オイトナ・フルシエラ)	
"	nana	(" " ナナ)	
Copilia	mirabilis	(コピリア・ミラビリス)	
Tortanus	forcipatus		
		(カラタス・フィコアティクス)	
Tortanus	japonicus	(ジャポニクス)	
Tigriopus	japonicus	(チグリオプス・ジャポニクス)	

介形類

Mecynocera	clausi		普
------------	--------	--	---

有鐘纖毛虫類

Proplectella	biorbruculate		
--------------	---------------	--	--

放散虫

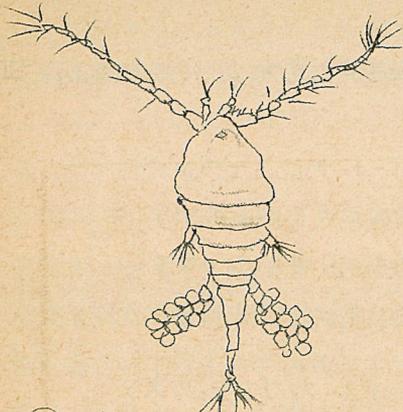
Hexalanche	sp		
------------	----	--	--

巻貝の幼虫 ----- ベリギア期

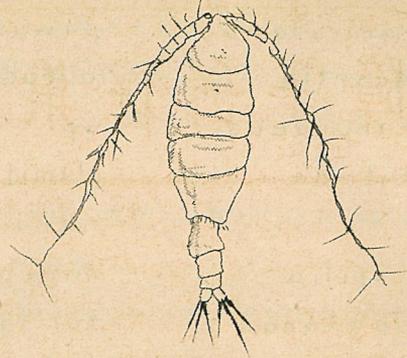
ウエの幼虫 ----- シラヒゲウ = (暖海産大型ウエ)

フジツボの一種の卵よりかえったばかりの Nauplius 期の幼生.

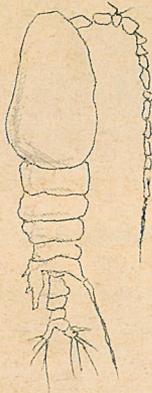
以上動物性のものは魚の餌として重要である。これらが異状発生すると、すでに知られている、いわゆる赤潮となり、逆に魚貝類を全滅させるのである。又、金魚の餌としてミジンコが用いられているのも知られている。四季的発生は春・秋などは夜脚目が多くなり、夏には橈脚目が多くなる。(参考—日本プランクトン図鑑)



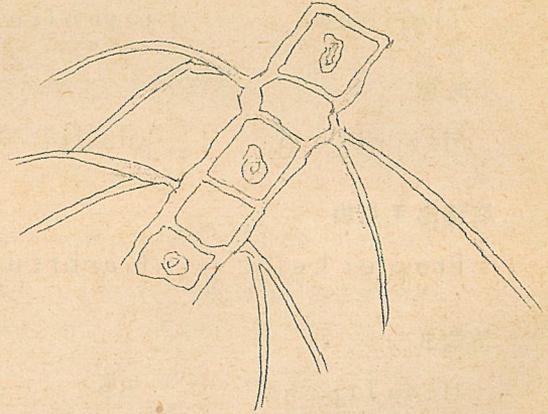
① オイト・ナナ



② エウケータ・ヤポニカ



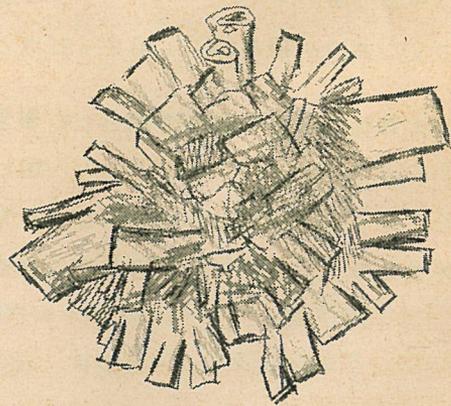
③ カラヌス・ハルブス



④ キイトケロス・ジスタンス



⑤ チグリオアス・ジャポニクス



⑥ ミラヒゲウニの幼虫

障子岳採集記

我々昆虫班は、今年初めて英彦山山系の障子岳へ採集に行った。5月29日(田中丸)、7月2日(田中丸・中野・酒巻・大面)、8日(夜間)、9日、21日、26日(武智)である。大きな期待をもって臨んだだけあって予想通りの結果であった。



(一) 7月2日 2年中野国政

7月2日我々昆虫班(田中丸・中野・酒巻・大面)は英彦山山系で近年注目されはじめた障子岳に採集に出掛けた。

7時に小倉駅を出発した列車は9時に彦山駅に到着した。車中今日の採集地についてや、天気の話ばかり話して別にたいくつではなかった。

駅前の広場は彦山登山の人々で混雑していたが、我々の行く障子岳へ向う人はいない。もっとも障子岳は昆虫採集家一由屋には興味の深い所であるが、普通の登山者には何の楽しみもないような所だ。

我々は鉄道に沿って進んでいった。皆殺気立って常に他人より先に立とうとする。こうしているといかにも早く進んでいるようにあるが、実際は少しも先に進まないから不思議である。元来採集家たるものは先手をとりながらしかも取り残しのないように心がけて居らねばならず、とかく自分勝手な行動をとりはじめるようである。

我々は、かくも一心不乱に獲物を求めているにもかかわらず、昆虫は一向に姿を見せぬ。なぜだ? けしからん。せつかく高い汽車賃をはらって来ているのに。

とっぜん皆の目が輝いた、オオムラサキの飛来だ。しかも新鮮で実に雄々しい姿だ。しかし一手も合すことなくはるかかなたへ飛び去った。僕は今日初めてオオムラサキにお目にかかって感激した。たゞ採れなくとも。

ここで皆と記念撮影した。ちょうど西南の生徒が通りかかったのでお願いしたら簡単にふられてしまった。どうもこちらのいかめしい姿に圧倒されたらしい。

鉄道沿いには別に大した採集場もなく、いよいよ山道にかかった。ここですぐオオ

ヨツスジハナカミキリを一頭採集。次いでキカスイモドカミキリも採集。ミヤマクワガタ・トラフコガネ等も採集しながら深倉峽に到る。途中大面君はオオトラフコガネ一頭を採集。深倉峽まで来ると、奥に深山に分け入った気がする。山は青く水は清く、我々が腹は空く。暑くてしょうがない。昨年行った佐多岬を思い出す。

人が通りぬことをよいことに大声で校歌・応援歌を歌った。変な格構をした人相の悪い四人組が、なにか叫びながら進んでいくさまは、正常の域を脱したアホが英雄に見えるであらう。しかし、町中ではこんな様子はしないからアホではないが、しきらないから英雄でもない。運動会のクラブ紹介にこの服装で出たら笑う者がいたが、少なくともその人達よりはましである。

くだらん洒落やなんかをいい合ってるうちに最後の人家も通り過ぎてしまった。目的地まではよい道がつづいているので楽だ。丸さんがイシガケナヨウを採集。他にこまごましたカミキリやハムシ等を採集した。道の左側、山腹は伐採ではげてしまっているが、右側はすごい絶壁がびようぶを並べたように立ちならんで奥にすばらしい光景だ。おもいきり空気を吸いこんだら鼻に小さな虫がとびこんだ。虫のせそかしさにあきれ、また自分の鼻の力に驚いた。

やっとのことで目的地に着いた。腹がへってしょうがないのでまきに坐って昼食にした。ところがこのまきに、フタオビミドリトラ・キスジトラ・ゴマフカミキリ・ヒメヒゲナガカミキリ・エグリトラカミキリ・ウスイロトラカミキリ等が次々に出現するに到っては飯どころではなくなった。30分ほどシラミつぶしに調べ、採りつくして再び飯にした。そして食事中はどんなことがあっても席を立てはならぬと堅く誓い合った。三分もすると、この同盟も破れたことはもちろんのことである。



ウスイロトラカミキリ

それから伐採中の森に入り込んだ。期待通りすばらしい獵場であった。初採集のものが続出した。まずミドリカミキリ採集。続いてクビアカトラカミキリ。皆すきな所に行つて必死の形相で獲物をさがしている。目立った採集物があると大声で宣言する。「それっ」とばかり皆が集まりそのあたりをひっくり返して回る。よい獲物があればさらに気をよくしてさがし、一向に採れぬときは発奮して見て回り、全く休む暇もない。日頃授業の時に気になる時間も、ここでは一向に気にならぬ。いやそれどころかこのまま時がたたねばよいがとさえ思える。人間とは勝手なもので自分の都合のよい方ばかり考える。そして思い通りならぬ事を嘆き悲しむ。もしこの世が思い通りにな

ったなら、一体この世はどうなるか、しかし全能の神はそうはなさらなかった。私はここに自然の大法則を見い出すのであります。その法則を見い出した時に、失望と希望が生まれ、明日への精神を養うのです。

とにかく、他にも色々の昆虫を採集した。主なものは、ヒゲナガゴマフカミキリ・ハンノアオカミキリ・カスガキモンカミキリ・ヒゲナガゴブヤハズ・マルバネユブヒゲカミキリ・クビジロカミキリ・フタオビミドリトラカミキリ・リンゴカミキリ・クモガタケシカミキリ・ガロアケシカミキリ・ヒシカミキリ・マツダクロホシタマムシ等である。4時過ぎに採集地を後にし帰りは超スピードで駅前広場まで直行した。途中で朝の女性に又出会ったので「さようなら」といったら「ニコッ」と笑って「さようなら」と答えくれた。旅の空の下の美しい一コマであった。

少し時間があつたのでアイスクリームとジュースで腹をふとらせ、6時半の汽車に乗り込み、暮れまゆく彦山駅を後にした。

(二) 7月8日夜間採集

2年 武智昭一



7月8日の夕方、城野駅から汽車に乗った僕は車中で昆虫趣味の会の人たち数人といっしょになった。彼らはみんな学生時代からの昆虫愛好者であり、社会人となった今でも暇を作っては採集に出かけるという人たちがばかりである。その人たちと虫の話に興じているうちに汽車は彦山駅についた。外はもうすっかり夜のどぼりが降りてしまっていて、真暗で、少し雨も降っている。駅前からみんなを割かんでタクシーに乗って麓までいった。6人も1台に乗り込んだのですごく窮屈だった。タクシーはデコボコ道を走った。頭が天井にぶっかかりそうになるほど跳ね、またぶつとばした。人家の明りも見えない所でタクシーを降りて、さあ出発と懐中電灯をつけたら、とたんに切れた。高島さんという会員の一人が自分の予備のを貸してくれたので助かった。もしそれがなかったら、この日の夜間採集は完全に失敗に終る所だった。雨がしとしとと降る間の中を採集地目指して歩き出した。暗闇なのでまわりがどんな様子なのか全く分らない。時々谷川の流れの音が右や左に聞えたり、ホタルが現われては消えるだけである。どのくらい歩いた頃だったが、前方にチラチラと明りが見え、人の声が聞えだした。そこが目的の採集地であった。懐中電灯で照らすと、炭焼小屋が

あって、その向うに高く積まれた木材の山が見える。僕はその山を見て思わず自振した。先に来ていたのは、足立中学の生徒達であった。彼らは夕方頃から来ていて、何と何を採ったとか自慢そうに話した。ちょっと僕は失望したが、荷物を置くとすぐ採集にとりかかった。初めての山で初めての夜間採集である。いつの間にか雨はやんで、ところどころ雲の切れ目からは星が見えていた。積まれた木材を電灯で照らしながらいねいに調べていった。樹皮はしっとりぬれて、木の香がただよっている。ビロウド・ニセビロウド・ナガゴマフといったカミキリ類は、昼間はいつも樹木の裏側にいるのだが、夜行性であるから幹の上をはっているに違いない。まずニセビロウドカミキリが電灯めがけて飛んで来た。まさか自分から飛んで来るとは夢にも思っていなかっただけに、これには驚いた。ここはもう中学生が荒した後だったのか、ニ、三匹のニセビロウドカミキリのほかは採れなかったのもっと奥に行くことにした。真暗な森の中の道を会員の1人と登っていった。夜間採集に関しては初心者である僕は、その人が立木の幹を照らして見るとすぐそれに習った。昼間の採集では毒を心得ているつもりでも、夜はいったいどんな所に虫がいるのかまったくわからなかったのである。それから立木ばかり照らして歩いた。時々ホソカミキリが手のとどかない上の方をはっていくのが見えた。森の中の清流を渡る時、ふと、福智山の水とどちらがうまいかなと妙なことを考えた。手ですくって飲んでみたら、寮外おいしかった。冷たく甘い液体が口の中を流れるようだった。伐材場へ行ってみた。あっちこっちに切った木材の山がある。みんなは思い思いの場所に陣取って虫をさがしている。僕は切株やころがっている木を調べて廻ったが、ホソカミキリとかナガゴマフカミキリなどのくだらぬい虫しか採れなかった。電灯の光がだんだん暗くなってきた。新しい電池を入れてあるのにおかしいと思ったが、時計の針はとっくに12時をすぎている。8時から9時頃にここに着いてから、夢中で採集していたのだった。もう寝なければならぬと思って炭焼小屋へ帰った。小屋ではみんなもう寝る用意をしていた。炭焼窯の中に新しい炭俵を敷いて、ぎっしりひしめきあって横になった。窯の口に置かれたアセチレンランプの光が、低い天井に反射してゆらゆらとゆれ、明日の期待に胸をふくらませる虫屋たちを眠りへ誘った。

(三) 障子岳の昆虫について

僕はこの翌日7月9日と7月21日、26日にも障子岳で採集を行なった。夜間採集では成果は余りなかったけれども、この3日間の昼間採集は僕にとって大いに成果が

あった。ここにそのめばしいものをあげることにする。

ヒゲナガゴマフカミキリ

障子缶では普通種と聞いているが、ほんとうに採りたかった虫である。採集経験者にいろいろ聞いてみると、森の中に積まれた伐材でそれについている地衣類に居るといふことであつた。僕が見つけた時もその地衣類の上にはいたが、鮮やかな黄緑の地衣類の色とカミキリの白黒のダンガラ模様は、ちょっと見ただけではなかなか見分けにくい。一匹見つけてから後は簡単に見つけることができた。

ハンノアオカミキリ

福智山では採れない虫なので初めて手にした時はうれしかった。僕が採ったのはみんな飛翔中であつたので、注意深く歩いておれば採集できると思う。

タキグチモモボトホソカミキリ

7月21日に行った時、中学時代の先輩が三匹も採ったので一匹譲ってもらった。26日には自分で採集した。みんな林の中の道のホゾリ用の丸太についていた。その木の樹皮は赤っぽい色で、なめらかだつたと思う。林の中では下にも注意して歩くべしである。

アカハナカミキリ

太陽がカンカン照っていた21日に採集した。花ではなく伐材の上で、しかも死体だつた。

ヒゲナガヒメルリカミキリ

朝がしとしと降っていた7月9日、せっかく障子缶に来たのだからと林の中をいったりきたりしているうちに、頭上の枝をチョンと叩いたら落ちてきた。何も変わったところのない枝だつた。ただ叩きごろの枝だつたにすぎない。

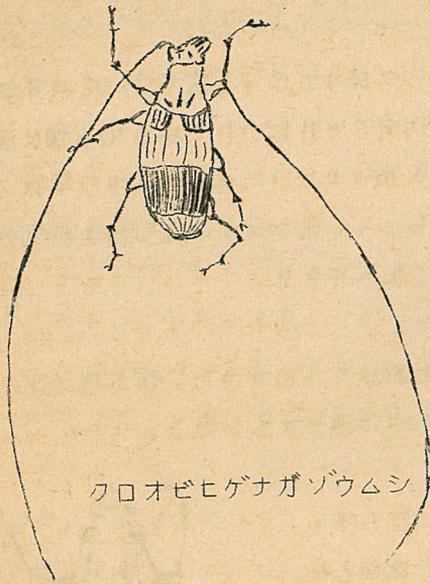
クロオビヒゲナガゾウムシ (次頁図参照)

一度は採りたいと思つていた虫である。やはり前のヒゲナガヒメルリと同様、桶の降る中で採ったが、これは伐材地の粗朶を叩いて獲たものである。



タキグチモモボトホソカミキリ

昼間採集した3日間のうち、晴れていたのは7月21日だけであつたが、採集した個体数の最も多かつたのは、雨が一日中降っていた7月9日である。せっかく障子缶へやって来たのにナニクソ、と木の葉も枯枝も叩いて叩いて、叩き回つたのが功を奏



クロオビヒゲナガゾウムシ

したのだと思う。障子岳はまさしく昆虫の
 豊庫である。どんなにヘタクソな採集者で
 も、珍品の1匹や2匹は簡単に採れる。こ
 の山での最も有効な採集法は、と言うと、
 何か珍品をドツサリ採る方法が有るみたい
 だが、そういう方法は別に無い。僕たちに
 して有るのはただガムシマラに歩き、目
 を光らせ、虫のいそうなあらゆる場所を調
 べま回るだけなのである。

障子岳昆虫目録

目録作成にあたって気のついたことは、

カミキリムシに比べて他の種類のナント少ないことかということであった。我々が障
 子岳において、「いかに興味本位に走ったか」の結果である。カミキリムシの60種
 類に比べ、ユガネムシが10種を越した程度で、あとはほとんど10種に満たないあ
 りさまである。あとの虫は省略して、カミキリムシとユガネムシだけを載せることに
 した。なを()内は頭数と採集日を表わす。(2ex VII・9)→1961年7月9日
 2頭。

I. カミキリムシ科

- | | |
|---|--|
| 1. ホソカミキリ (2ex VII・9, 2ex VII・26) | 10. アオスジカミキリ (1ex VII・9) |
| 2. ヨコモンヒメハナカミキリ (1ex VII・29) | 11. ミドリカミキリ (4ex VII・2) |
| 3. オオヒメハナカミキリ (7ex VII・29) | 12. トビイロカミキリ (3ex VII・2, 2ex VII・9) |
| 4. アカハナカミキリ (1ex VII・21) | 13. トゲヒゲトビイロカミキリ (1ex VII・2,
1ex VII・9) |
| 5. ヨツスジハナカミキリ (9ex VII・2,
4ex VII・9, 2ex VII・21) | 14. クビアカトラカミキリ (7ex VII・2,
7ex VII・21) |
| 6. オオヨスジハナカミキリ (2ex VII・2,
2ex VII・9) | 15. ウスイロトラカミキリ (30ex VII・2,
3ex VII・21, 2ex VII・26) |
| 7. ホソハナカミキリ (12ex VII・29) | 16. ニイジマトラカミキリ (2ex VII・2,
1ex VII・9, 4ex VII・21, 2ex VII・26) |
| 8. ニンフホソハナカミキリ (1ex VII・29) | |
| 9. トラフホソハナカミキリ (1ex VII・2, | |

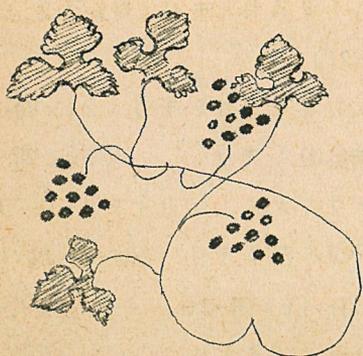
17. フタオビミドリトラカミキリ (2ex VII.2, 1ex VII.21, 1ex VII.26)
18. エグリトラカミキリ (5ex VII.2, 1ex VII.9, 2ex VII.21)
19. マノトラカミキリ (1ex VII.21)
20. シラケトラカミキリ (4ex VII.2)
21. キスジトラカミキリ (20ex VII.2)
22. タキグチモモブトホソカミキリ (1ex VII.21, 1ex VII.26)
23. =セビロウドカミキリ (1ex VII.2, 6ex VII.9, 1ex VII.26)
24. ヒゲナガゴマフカミキリ (8ex VII.2, 5ex VII.21)
25. ヒゲナガゴマハズカミキリ (5ex VII.2, 2ex VII.9, 2ex VII.21, 5ex VII.26)
26. ヒメヒゲナガカミキリ (12ex VII.2, 2ex VII.26, 1ex VII.9)
27. ビロウドカミキリ (3ex VII.2, 5ex VII.9)
28. チャボヒゲナガカミキリ (3ex VII.2, 2ex VII.9)
29. クワカミキリ (1ex VII.9)
30. ゴマフカミキリ (1ex VII.2)
31. タテスジゴマフカミキリ (1ex VII.9)
32. カタジロゴマフカミキリ (1ex VII.2)
33. ナガゴマフカミキリ (4ex VII.9, 3ex VII.26)
34. マルバネコブヒゲカミキリ (1ex VII.2)
35. ナカジロサビカミキリ (3ex VII.2)
36. トガリシロオビサビカミキリ (3ex VII.2, 2ex VII.9)
37. クワサビカミキリ (2ex VII.2, 5ex VII.9, 1ex VII.26)
38. ヒシカミキリ (2ex VII.9)
39. キクスイモト^キカミキリ (4ex VII.2, 1ex VII.9)
40. クビジロカミキリ (1ex VII.2)
41. アヤモンチビカミキリ (3ex VII.2, 9ex VII.9, 2ex VII.21)
42. ヒトオビアラゲカミキリ (3ex VII.2)
43. イボタサビカミキリ (1ex VII.9)
44. ドイカミキリ (2ex VII.2)
45. コブスジサビカミキリ (1ex VII.2, 2ex VII.21, 3ex VII.26)
46. クモノスモンサビカミキリ (1ex VII.9)
47. ハスオビヒゲナガカミキリ (1ex VII.21)
48. アトモンマルケシカミキリ (7ex VII.2, 10ex VII.9, 1ex VII.26)
49. ガロアケシカミキリ (12ex VII.2, 6ex VII.9, 1ex VII.26)
50. クモガタケシカミキリ (2ex VII.2, 1ex VII.9)
51. シラオビゴマフケシカミキリ (1ex VII.2)
52. ゴイシモモブトカミキリ (2ex VII.2, 3ex VII.9)
53. トゲバカミキリ (10ex VII.9)
54. ハンノアオカミキリ (1ex VII.2, 3ex VII.21)
55. カスガキモンカミキリ (2ex VII.2)
56. キモンカミキリ (3ex VII.2)
57. ヒゲナガヒメルリカミキリ (1ex VII.9)
58. シラホシカミキリ (7ex VII.2, 1ex VII.21, 1ex VII.26)
59. ダイセンカミキリ (1ex VII.2)

- | | |
|--|--|
| 60. ラミーカミキリ (1ex VII・21) | 2. アオハナムグリ (1ex VII・2, 1ex VII・21, 2ex VII・26) |
| 61. ヒメリンゴカミキリ (2ex VII・2) | 3. ハナムグリ (1ex VII・9, 1ex VII・26) |
| 62. ホソキリンゴカミキリ (1ex VII・29) | 4. クロハナムグリ (1ex VII・2) |
| 63. クロチビカミキリ (6ex VII・9) | 5. ヒラタハナムグリ (1ex VII・9) |
| 64. ホタルカミキリ (2ex VII・2) | 6. ヒメトラハナムグリ (2ex VII・2, 1ex VII・26) |
| 65. タイワンメダカカミキリ (2ex VII・2, 1ex VII・9) | 7. コアオハナムグリ (4ex VII・2) |
| 66. セミスジセリンゴカミキリ (2ex VII・2) | 8. カナブン (2ex VII・2) |
- II. クワガタムシ科**
- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1. ノゴリクワガタ (1ex VII・9) | 9. マメコガネ (2ex VII・2, 1ex VII・9) |
| 2. コクワガタ (1ex VII・26) | 10. コガネムシ (3ex VII・2) |
| 3. スジクワガタ (1ex VII・26) | 11. セマダラコガネ (7ex VII・2) |
| | 12. ナガチャコガネ (1ex VII・9) |
| | 13. ヒゲナガビロウドコガネ (2ex VII・9) |
| | 14. オオトラフハナムグリ (1ex VII・2) |
- III. コガネムシ科**
- | |
|---|
| 1. アオカナブン (1ex VII・9, 4ex VII・21, 1ex VII・26) |
|---|

◆ 1961年度 ◆

文化祭の反省

(上) 2年 中野国政



1961年度文化祭は11月2・3日の両日に行われた。今年も昨年に劣らずリッチな文化祭であったと自負しているが、やはり、反省し、改善していかねばならない点が多くあると思う。

＝学期開始と同時に一応大まかな計画を立て、文化祭の前日にあわてる事のないようにした。又

面高・戸畑高の文化祭を見学し、非常に得る所があった。

計画は立てたが、実際に働き出したのは、中間審査も終り、あと二週間となつてからであつた。特にテープの吹き込み・昆虫整理に時間を費した。

次に、今年の計画を記しておく。

- 1：佐多岬・福智山・障子岳の植物・昆虫展示。
- 2：標本室開放。
- 3：佐多岬・都井岬・平尾台のスライド。
- 4：解剖。
- 5：味盲検査。
- 6：園芸班（サボテン出品）
- 7：研究発表。
- 8：プランクトン研究。

各班の反省は後に載せるので、ここで全体的な反省をしてみると、今年も例年のごとく、仕事の分担上での不平等が目立った。昨年の反省会の時にもこの事が出て、今年こそは無くそうと思つていたのだが、残念である。これは、計画が徹底していなかつたことが大きな原因であるが、手のすいた者は、他のいそがしい人の分まで加勢をしてやろうという思いやりのなかつたせいではあるまいか。一つの大きな計画を進めて行く時は、各々が自分の分担を責任もつてやると同時に、他との連絡をしっかりと、バランスのくずれない状態にしておくことが大切なのである。又夜遅く迄居残りをする者とそうでない者との差がひどかつた。見方によると、そんなにまでしなければいけないのは、その人達が、計画もなくしたからであつて、合理的にしておれば居残る事などしないであらう。ただ残るだけが能ではない。といった意見が出て来る。だが残つた人は経済的にも精神的にも、勉学においても相当苦しむだにちがいない。それをただ上のような意見でかたづけするのは、あまりにひどい。それで、来年は是非次のようにしてもらいたい。

- ・ 計画を徹底し、各人の分担をはっきりする。
- ・ 文化祭の前に金を集め、遅くまで残る人にパンを配る。
- ・ 順番に早く家に帰る日をきめておく。

などである。しかし根本は各人の考え方と、自覚に基くものであつて、強制はし難く、実行は不可能かも知れないが、部員が一致団結する事によつて、来年もリッパな文化祭をしてもらいたい。

昆虫班

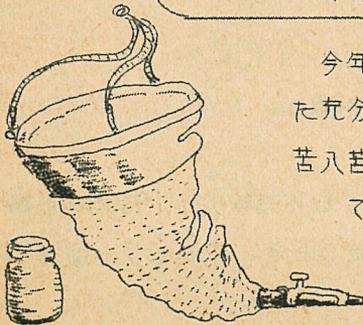
2年 武智 昭一

今年も例年のごとく、直前になると夜遅くまで残ってバタバタした。標本の方は9月に北九州昆虫展に出品したので、早くでき上っていたのだが、何となくズルズルといつもとと同じようになってしまった。昆虫班としての展示の内容は、標本、主な虫の説明文、虫の拡大写真・佐多岬・福智山・障子岳の地図と説明文、幼虫飼育の枯れ藁などである。

標本は、佐多岬の一部を除いて全部本年のもので、内容的にも充実していたと思う。ことに昨年なかった障子岳の進出と、佐多岬2年間の標本は一層内容を豊富にしたと思う。虫の説明文は多少文章が典型的になったきらいがあったが、酒巻君の名カットで引立った。虫の拡大写真は、高原先生に写していただいたもので、初めての試みである。それから新しく説明員を作って、参観者に詳しく説明した。昆虫などは一般の人にはほとんど興味がなく、素通りが多かったのだが、説明することによって案外興味深く見てもらえたのではないかと思う。その点採集地の地図や枯れ藁、ヒゲナガゴマフカミキリと地衣類の保護色関係の実物標本等は説明に役立ったと思う。研究発表は「レンガベイの越冬昆虫」をしたが、ほんの数分で終り内容的にはたいしたものではなかった。そして、これ1つであったことも寂しい。来年は昆虫班としての研究発表を、少なくとも2つは出した方がよいと思う。研究発表がないということは、1年間研究らしいものをしてないということだからである。説明員を作ったことは、画期的なことであったけれども、何といても初めてのことで、説明員の交代がスムーズに行かなかつたり、説明のしかたにも考える余地があったと思う。来年の課題は、研究発表と、説明員の充実である。

プランクトン班

2年 伊藤 正彦



今年のプランクトン班は、発足1年目のので、これといった十分な成果もあげられず、文化祭に展示する為に我々は四苦八苦であった。佐多採集旅行の際の採集品と、折々につけて小倉市内の池川 etc.で採集したものの顕微鏡写真を大いそぎで整理し、展示板にバタバタはりつけただけであった。しかし、プランクトンと同じ場所にカブ

トガニ・シヤミセンガイ etc.を一緒に展示したので、量的にはかなりあった。顕微鏡写真は全部で38枚で、予定では100枚程度展示するはずであったが、展示板の枚数に制限され、又写真技術の未熟の為に鮮明な写真が撮れず、良い写真を選ぶのに相当苦心をした。初めての試みとして、プランクトンの初歩知識をパンフレットにして、見学者に配布したが、プランクトンと言えは目に見えないもの、微小生物と決めてかかっている人達がかかり多いのには少なからず驚いた。顕微鏡写真においては、露出像の解像度、倍率が互に相反関係にある為、プランクトンの大きさに関連して倍率露出を決定するのに少なからず苦勞した。展示板に等間隔で規則的にならべたのでは面白味がないと思ったので、試験管に花をさして、セロテープで展示板の随所にとめたが、これはかなり好評であった。とかく採集品の展示は、殺風景になりがちなので、こういう試みも大切ではなかろうか？ 特に生物に興味のある人は別として、一般の人は、一つ一つの展示品を、あまり詳しくは見ない傾向があるので、見学者の目を引く意味で、展示方法は一考に値する。プランクトンは大部分が極小生物であるため、展示における最大の目的である「見せる」ということが、肉眼の範囲では限られてしまうので特に考えなければならぬ。また、昆虫や植物の様に日常生活において目立つ存在ではないので、展示板を一目見て、プランクトンがいかなるものか、わかりやすく展示することが、来年は特に大切であろう。また来年は水質とプランクトンの関係、地域的変化、日時的変化、日照、水温との関係等についても、わかりやすく展示して、プランクトンをもっと身近なものとして感じさせるようにしなければならぬと思う。来年はプランクトンも2年目になるので、もっと充実した発表ができるだろう。

----- 「人は常に前進しなければならぬ。前進をとまらぬ

前進こそ、真の前進である。-----」

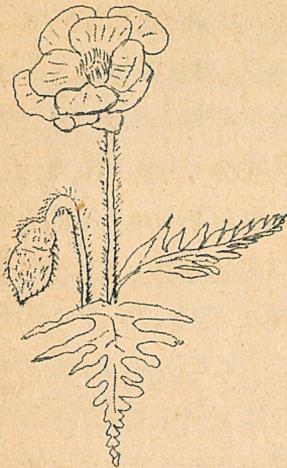
植物班

2年 井上 浩輔

昨年に続く佐多採集旅行の成果の為に、全体的に今年も好成績を上げる事ができた。相も変らぬ文化祭前の追い込み。標本作成、鉢植、写真等着々とでき上って行く。皆の努力の結晶を当日、みごとに結ぶために、植物班は皆でがんばった。フスマ紙に一つ一つ標本紙を、付きの悪いセロハンテープでつけながらいつしか、時間もわすれてしまいそうなる多忙ぶりであった。

ここで具体的な反省をしてみよう。佐多の植物、ミダ植物は、昨年に加えて展示し

たため、一層の豊富さを示した。それに、きれいな熱帯の植物写真、世界にもめずらいという七面草、等どれも一応の心をひいた。又、今年には説明員を加えたため、来客によりよく理解してもらった事ができた。せいぜいの説明で、鋭い質問にたじたじになったこともあったが、とにかく、説明員は今後も続けるようにしてもらいたい。研究発表として、佐多の植物の発表を新谷が行った。発表内容は、採集品説明程度のものであった。例の如く、発表を聞くものは少なく、少々寂しかった。そして、これも昨年の如く、高原先生の撮影によるスライドを行なった。こちらの方は、美しい花、熱帯の明るい太陽、青々とした海等見るべきものも多く、多くの参加者があった。我班を反省するに、班員の人数、活動状況などから、適当な文化祭であったようだ。来年入って来る新一年に期待し、反省を終る。



園芸班

1年 新上 義昭

倉校入学して初めての文化祭を、無事終ってほっとしている。が、又我々園芸班の文化祭に於ける活動内容や、成果を振り返ってみると、大いに反省させられる面がある。

第一に、発表内容からみると、本年度は、会場に見に来てくれる人に身近に感じるようにということに、主眼をおき、まずサボテンブームにあやかって、サボテンを20鉢ぐらい展示した。これは見事に我々の着眼が的中し、多くの見学者の方々から、質問され、部員の我々の知識では間に合わず、急いで本をめくって調べるといった場面もあったほどであった。又、サボテンに対抗してカトレヤをはじめシプリパジウムなどの洋蘭を数多く展示したが、カトレヤの気品のある美しさと、匂のよさに、これ又多くの見学者が感嘆の声をもらしていた。このカトレヤの美しさにすっかり魅惑された西高の新聞部の女性2人から、後日、「カトレヤがあんなに美しいとは知らなかった。見せて下さってありがとう。」という意味の手紙をもらった時は、大変うれしかった。しかし、展示物の大半は借り物で、我々園芸班が実際に、タンセイこめて栽培したものは、ごくわずかであったという事は、過去一年間の活動に、何か欠陥があるのではないかと思われる。しかし、カトレヤのような高級なものは、我々園芸班では温室という最も大事な、しかも必要とするものが

ない悲しさで、どうしても冬の寒さには耐えきれないものが多く、栽培困難であるから、いたしかたない事だろうが、ぜひ来年の文化祭は、今年よりは一つでも我々の手で栽培したものをふやしたいものだと思う。

第2の問題は、見学者への説明の事である。今年はプランクトン班と隣り合わせで、プランクトン班の部員が説明した人を引きついで園芸班の部員が園芸の説明をしてやるようにしたのだが、この二班の連絡がうまくいかず、プランクトン班までは説明を聞いたが、園芸班の説明は聞けなかったという人がずいぶんいたような気がする。そんな人達には、大変すまなかったと思っている。だから、来年は、各班との連絡をうまくとりたいと思う。

次に、ドイツアザミの種を希望者へ分配したが、なかなかこれが好評だったので、来年も又、もっと種類を多くして、皆に分配して、園芸というものを身近に感じてもらおうようにしたい。又、見学者には、何か記念品をあげたいと思う。それは、「花で作ったしおり」etc. 考え中。ぜひ実現したい。

最後に、文化祭を全体から見ると、今年は成功したのではないかと思います。なぜなら、我々の最大の目標である「皆に園芸というものを身近に感じさせる。」という点においてです。又少ない部員（全部一年生）でよくここまで出来たと思います。これは先輩に大いに援助してもらった為だと、感謝にたえません。

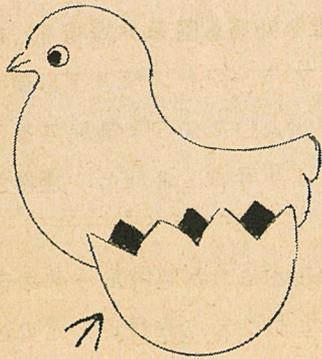
(下)

皆で同じ事をするのは楽しいものだ。それが辛ければ辛いほど、それは楽しい思い出になる。高校生活においてこれほどの思い出として残るのは、文化祭以外にはないであろう。毎日暗くなるまで一生けん命に準備をし、リッパな文化祭を行なおうとはりきったものだった。

特にこの時生まれる友情は、何ものにも換え難いものだ。差し入れのにぎり飯を皆でほほほり、フラスコで沸した水を、ビーカで飲む。ああでもない、こうでもないという無粋な言葉をめくらせ、くだらない事に議論を聞かせ、精根を使い果して夜道を帰る。友達は言う「お前は毎晩遅くまで残って、一体何になる」、僕答えて曰く、「本当になあ、-----。しかし、おまえには判るまい！」

来年もガンバレよ。

私達の研究



あ、フランキ

3年 田中丸 邦雄

卵を暖めて、ひよこにしてやろうと云う気持ちになったのは、去年の春の事だった。

友人の家で親子どんぶりを食べているうちに何となくそんな話しが決ってしまった。

三年生にもなった事だし、そろそろ勉強にも手をつけなければならぬだろうから、また寒い時より暑い季節の方が失敗も少いだろうから、実施するのは、暇のある夏休みにしよう、とこうである。

夏休みも近くなった時、頭をひねって、どうやらフランキの構想が出来上がった。

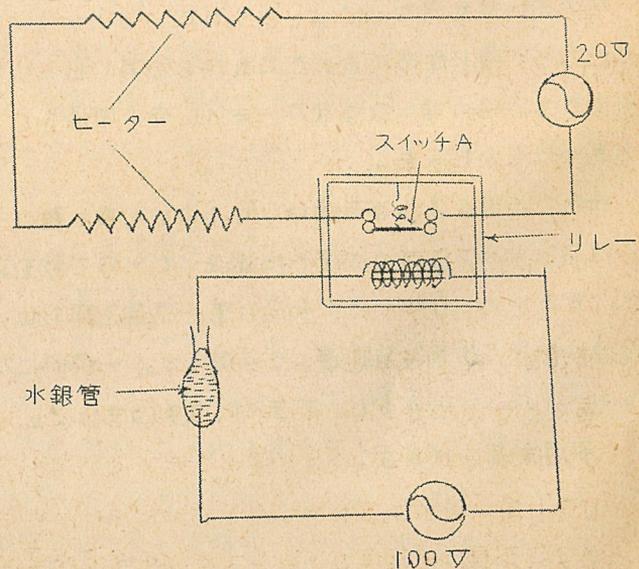
出来上がったのは構想だけなのに、二人はあさはかにも、養鶏場の門をたたき、有精卵を求めた。が、そこの人から一笑に付され、あらためてフランキの必要な事を悟ったのである。

ここでふ卵器の構想を紹介しておこう。

問題は、いかにして一定温度、即ち摂氏39度を保つかと云う事にしぼられる。

この問題を解決するために

第1図 A ふ卵器配線図



頭に浮んだのが水銀である。これの温度膨脹を何とか卵巻に結びつけてやろうと考えて、次(第1図A-前頁)のような配線図が出来上った。

これはリレーを用いた、二つの回路の組合わせである。温度が低い時は、ヒーターのついた回路に電流が流れている。このヒーターによって器内の温度が上昇し、それにつれて水銀管内の水銀が膨脹し、ついには上から下した導線と接触するようになる。

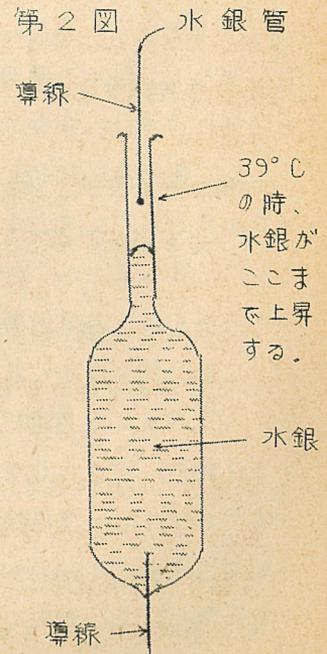
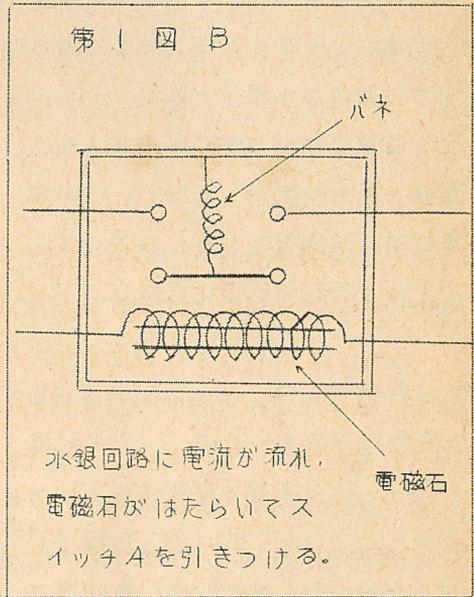
この時、水銀管のある回路に電流が流れ、この電流によってリレー内の電磁石が働き、スイッチAを吸いよせるので、ヒーター回路はリレーの所で切れ電流が流れなくなる。

次に、ヒーターに電流が流れないと、器内の温度は下がるが、これに従って、水銀も収縮し、水銀管内で水銀回路の電流が切れる。

するとリレー内の電磁石が力を失い、今まで吸いよせられていたスイッチAがもとに戻る。ヒーター回路に再び、電流が流れ、器内の下った温度を暖めるのである。以後このような操作を間断なく、くり返す訳である。このようにして、全く自動的に、一定温

度を保てる事が、賢明なる読者には、お分り頂けたと思う。以上が卵巻の構想の肝心な事である。もっともこれは私の考えではない。虫ばかり追いまわしている頭にこんな考えが浮ぶはずがないので、そこは、友人やデーンキに強い無線部の頭を借りて来た次第である。

7月の終り頃、1ダース入りキリンビールの空箱の内側に銀紙をはり、上と下にニクロム線をとりつけ、蝶つがいふたをつけた。そしていよいよ心臓部である水銀管の製作にとりかかった。幾度も失敗を重ねた。8月の暑さなかにガスバーナーととりくんでいると汗びっしょりになって来る。あまり夢中になって、窓ガラスにひびを入れるような事もあった。しかしよくよく考えてみると、水銀の膨脹率と、ガラス管の太さの関係で、温度



による変化が非常に少く、この水銀管ではほとんど実用にならない事が分った。今までの汗が水の泥になってしまったので、ぐらぐらして一時中断する。

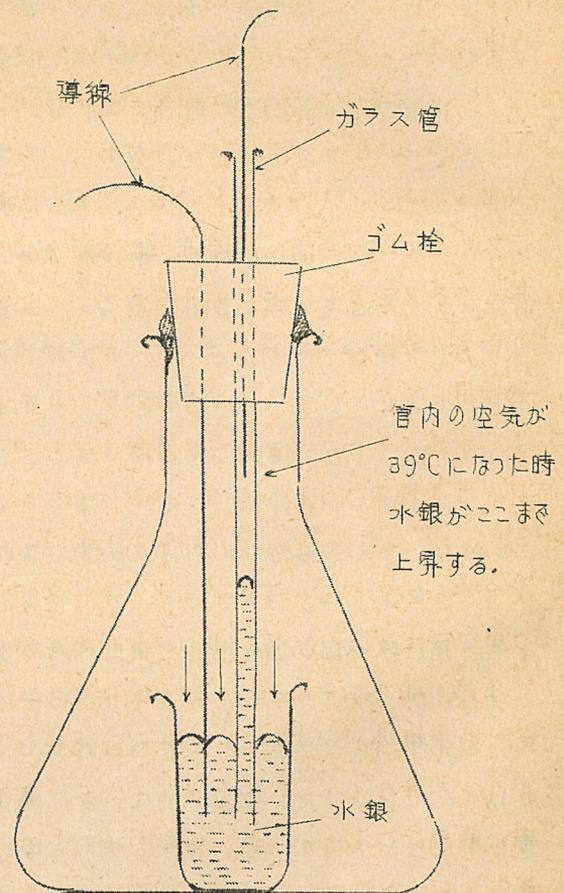
9月になった。暑さもやわらいだ。頭もだいぶ冷えて来た。そして上記の解決法が頭に浮んで来た。それは空気の温度膨脹を利用したものである。第3図に示すものは、二・三回改良を加えて、ずっと後になって出来たものである。

温度が上がって、三角フラスコ内の空気が膨脹すれば、水銀だめの水銀を押えるので、ガラス管内の水銀が上昇し、上から下っている導線と接触するに至るのである。勿論その時の温度が39°Cになるように、導線の高さを調節しておく。この器具は前の水銀管を改良したもので、これによる配線に変化は無い。

9月の半ば頃、ハンダゴテとドリルをひっかけまわして、一応の配線を終り、この水銀管の製作にヒリかかった。しかしこれは思った程はかどらなかつた。ほんの少しではあるが、焦りもみえて来た。試験はたびたびあるし、最大の難関である入試も次第に近づいて来るのである。会うたびに部員は、何時になったら出来るのかとひやかす。中にひどい奴がいて、作る前から、絶対に失敗するだろうという意味の事を自信たっぷりに語り聞かせてくれるのであった。こうなったら意地だ。卵をかえずまで絶対にやめられない。

10月の半ばに一度冒険をやった。水銀管は完成していなかった。20Vの電圧をかけて、器内の温度がど北

第3図 改良型水銀管



矢印は、温度膨脹による空気の圧力を示す。

だけ上るのが分らないので、テストする必要があった。

“温度ヒューズだけで大丈夫かな？”“火事になったら大問題だよ。”“なに構うものか、やっちゃえやっちゃえ。”と云うんでやる事に決定。暗室を整理し、可燃性の物を外に出し、カーテンはとりつけてあったのでそのままにして、クラブにあったトランスをつなぎ、20Vにして、スイッチを入れ、鍵をして帰った。翌朝、いつも遅刻ばかりしている私と友人とは、始業30分前に門の前でばったり会った。“どうなっているかな。”“学校はまだここに あるんだから大丈夫だった のだろう。”“カーテンが焦げたくらいで済んだかな。”

ひどい会話をヒリかわしながら、部室に行き、ふ卵器を見ると30°Cにしかなくていなかった。全く人を馬鹿にしている。

これはもっと電圧を上げなければならないと云うので、友人は次の日、家からたっぷり15kgはあるトランスを肩にかついで持って来た。50Vにして前日同様のテストをしてみると70°Cまで上った。そこでこれを使用する事にした。

文化祭が終り、11月も半ばになったが、問題の水銀管はまだ完成しなかった。何度もテストをしてみたが、うまく温度を保つのは、せいぜい1日だった。一つには、ゴム栓とフラスコ及びガラス管を完全にくっつけるための接着材の問題があった。ゴムノリやバルサン、はてはピッチまで持ち出したが、いずれも失敗し、最後にセメダインを使用した。これも完全とは云えなかった。

また水銀の中につかっている銅線が、水銀と化合して、アマルガムをつくり、水銀特有の表面張力が失われ、ガラス管の壁に、ところどころ附着して温度調節を不正確にした。

完全なふ卵器をつくるには、まだまだ時間がかかりそうだった。落第するのならともかく、三年生としてこれ以上日数を費す事はできないので、未完成ながらも、とにかく本願の卵のふ化に乗り出す事になった。

そこで養鶏場から1個20円也の有精卵を24個購入して、ふ卵器の中に入れた。(ボロイネ全ク、オンドリをほおりこんでおけば、13円が20円になるのだから) 時に観察記録をとった訳でもない。

器内には水を入れたシャーレを置いて湿度を高くした。また温度計を入れたが、この温度計は、時として50°Cにまで上り、また30°Cに下る事もあった。

入れて二日ばかりたった時、一つとり出して割ってみた。既に盤割が起っていた。五・六日たつと、電灯の光に透かすと、血管が放射状に走っているのが観察できた。

十日ぐらいで目玉を形成する卵もいくつがあった。

故課後、補習が終って、部室に行つて見る度に、生長をする卵は少なくなっていった。やがて 21 日が過ぎた。期待もしていなかったが、殻を破ってくるひよこは一羽も見い出せなかった。

十二月の半ば、卵を入れてから既に 25 日程経過していたので、残った卵を割ってみる事にした。静かに割って、殻を一つ一つ注意深く取除くと、ぬるぬるしたうぶ毛につつまれ、大きな眼をぴたり閉じて、静かに眠っているひよこが現われて来た。十七・八日間生きていたのだらう。たったこれだけの間に-----。玉子焼きの材料から、一つの生命が形成される姿をまのあたりにして、しばし、生命の神秘に敬服の念を感じる。

残りの卵も同様に割つて見た。しかしこれらは、ふ卵器の中に入れてあの気まぐれな温度計のためか、生命を決つてから既に日が経ちすぎて、完全に腐っていた。

それで結局このふ卵器は、孵卵器ではなくて、腐卵器と書くべきであると言う事に話が落ちつき、この長い、のんびりした、無計画な実験に終止符を打った。

反 省

何だか落語みたいなレポートになってしまつて申し訳ないから、最後だけ少し真面目な事を書いて、花を飾っておこう。

この実験は、結果的に見ると完全な失敗に終つた。その最大の理由は、時間の不足、次が努力のそれであらう。実験の目的は卵を孵化する事にあつたのだが、その目的を達成するための手段である、ふ卵器の作製に、大部分の時間と労力を費してしまつた。

従つて反省すると云つても、自然ふ卵器作製の事になる訳だが、この不完全なふ卵器をよくするために気がつく点をあげると、

1. 水銀管の中は充分乾燥させる事、
2. 水銀管に入れる導線は、アマルガムをつくらない金属を使用すること。
3. 強力な接着材で、水銀管を完全に密閉する事

等である。

しかし、この点を良くしたとしても、必ずしもうまく行くとは限らない。

一つの問題が解決されても、またすぐ別の問題が起きて来るものであるし、一度解決のできた問題にしても、それをさらに良くするために、じっくり取りくまねばならぬ時があるものなのである。ささやかながら、このような教訓を、しみじみと思い知らされた、今回の実験であつた。

(S. 37, 4, 10)

吸水による蒸散量の測定

昭和37年3月30日

1年 安田 敏子

1年 松永 妙子

目的

蒸散量の測定。

原理

植物の含水量が正常状態のものよりも、特に少ないものでない限り、蒸散量は大体吸水量と等しい。そこで、吸水量を図の様な装置により測定する。

器具

三角フラスコ（水を入れ栓をし、水との境目が、0cc になる様に適当に目盛りをうったもの）1個。

これに合うゴム栓に2個孔をあけたもの、一方には温度計、他方には実験に使用する植物をさす。水。

方法

数枚（私達の場合は3枚）の葉をつけた切枝を、さらに水中で切って、空気の泡が入り込まない様にしたものを栓の一方にさし込み、他方の孔には温度計をさし、それを水をいっぱいにしたフラスコに気泡の入りぬようさし込む。

吸水に伴って、目盛りの末端が動くので、

それを適当な時間毎に読む。その場合、水温、気温、湿度をも調べておく。

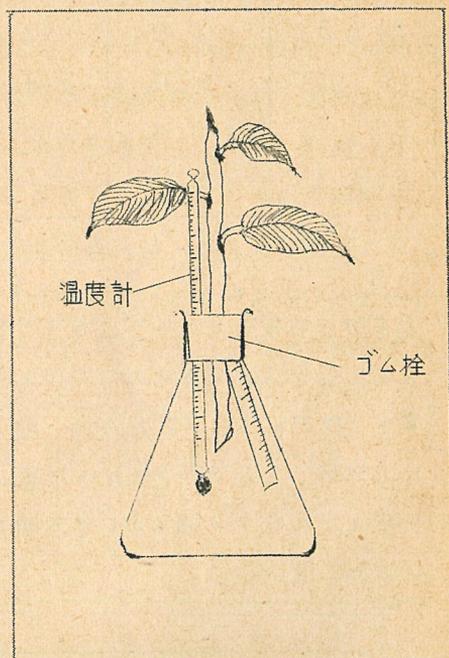
実験終了後、葉を切り取り、方眼紙の上で輪廓をとり、その面積を測れば、単位面積から、単位時間に蒸散した水分量を計算する事が出来る。

結果

（次表参照）

単位時間 0.316 cc / 時

単位面積 0.048 cc / mm²



測定時刻	吸水量	水温	気温	湿度(%)	その他
10:35	0	10.8	12.0	62.0	直射日光 風通し良好
11:05	0	14.5	12.0	86.5	
11:35	0	16.5	12.0	86.5	風が少し強 くなった。
12:05	約0.1	18.5	14.0	76.0	
12:35	0.2	20.0	15.0	66.0	
13:05	0.3	21.0	15.5	76.5	
13:35	0.4	22.0	15.0	66.0	
14:05	0.5	21.5	14.5	76.3	
14:35	0.8	22.0	14.0	65.0	
18:35	3.0	14.0	12.0	86.5	微風 間接日光
20:35	3.4	12.0	11.0	86.0	
22:35	3.8	11.5	11.0	86.0	

反省

温度計と切枝をさしたゴム栓をフラスコに入れるとき、気泡のできないようにするのに力を入れすぎたのでフラスコを割った。

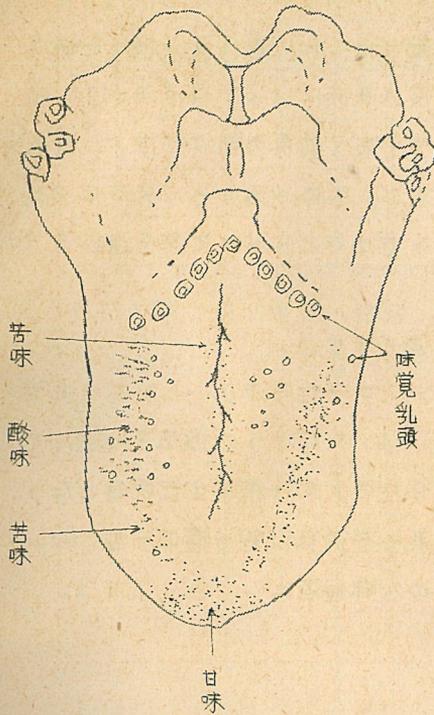
葉が3枚では少なすぎたのか、思ったよりなかなか吸水しなかった。2mm²位吸水した時、2人で手をたたいて喜んだ。

切枝とゴム栓との間に少しすき間(目に見えない程度)があったので、結果にむびいたに違いない。

P・T・Cの味盲研究

1年 佐藤 幹雄・1年 木村 邦夫

味覚は甘味・鹹味・酸味・苦味の四種に大きく区分されます。これらの味は全て舌の上にある「味覚乳頭」と呼ばれる器官によって感じます。その乳頭をとって調べると沢山の「味蕾」とよばれる感覚細胞があり、それから出る神経繊維が刺激を脳に伝



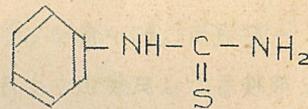
(舌の味覚部位)

きない人を色盲というのと同じ事です。この他極く少数ではありますが甘いとか、すっぱいとかいう人もいます。

える様になっています。しかし一つの味蕾が四種の味を同じ様に感ずるのでなく、ある部分の味蕾は主に甘味を、別の部分にある味蕾は苦味を感ずるのです。

ところで味は舌の部位によって違うだけでなく個人差、つまりめいめいの人で感じ方が違う事が判って来ました。しかもその個人差は遺伝性のもので、特にP・T・Cという薬でよく調べられています。

P・T・Cというのは Phenyl-thio-carbamide (Phenyl-thio-urea)の略号です。この薬を適当に水でうすめて溶液にしたもの、或はその液を濾紙にしませて乾燥させたものをなめてみますと大部分の人は苦味を感じます。しかし一部の人には少しも味を感じません。このように味を感じない人を味盲 (Taste-blindness) といいます。T度色の区別ので



P・T・Cの化学構造

第 1 表

研究者	対象	有 味		無 味 (味盲)
		苦 味	その他の味	
Blakeslee	アメリカ人	65.4%	14.2%	20.3%
力 丸	台湾本島人	89.5	3.4	7.1
福 岡	日本人	64.5	26.8	9.1
田 中	"	84.6	4.0	11.4
小 松	"	84.0	2.1	13.9
近 内	"	84.8	0.7	14.6
吉川・萩田	"	85.0	2.7	12.3

この現象の判ったのは今から20年程前の事で、アメリカのフォックス(Fox)という人が見つけたもので、今では世界中どこでもこの葉又はこれに近い葉を使った研究が行われるようになりました。その結果、味盲の頻度は民族によってほぼ決まっていることが判りました。その結果の一部を示したものが第1表(前頁参照)です。この表に示したように日本人について数人の研究がありますが、大体9%から14%位の人が味盲者であります。頻度は葉の種類や濃度・調査の方法などによって幾分違いますが、大体10人に1人位が味盲です。

この味盲の頻度は性別や、年齢によつての変化はありません。

次にその遺伝関係を調べてみますと味盲は有味に対して劣性であり、しかもこれ迄の研究によりますと有味が無味(味盲)かという違いは、ただ1つの遺伝子によってきまららしいのです。ですから味盲者同志の結婚から生まれる子供は全部味盲となり、有味者同志・又は有味者と味盲者との結婚から生まれる子供は両親の遺伝子型(Genotype)によつて全部有味者になったり、一部のもののみが味盲者になったりします。

(2) 文化祭での実験について

(イ) 実験方法

実験に使用した試験紙は40分の1モル(約0.37%)のPTC溶液を濾紙にしませて風乾したものです。余り被検者の状態について注意する必要もありませんでしたが、一応直前に何か食べていないかを尋ね、食べていた人はさげました。

また被検者には試験紙の薄片を与え、それをよく味わってもらい、その結果を第1図の様な薄片に書き込んでもらいました。その時の実験態度の感じとしては、同じ人が三度も四度も来たり、試験紙をどこにでも吐き散らす。うがいの水で試験場をぬらすなど、不快な事が多かった。しかし中にはシマーレを間違えて、人のしゃ

ぶつたのを又しゃぶるなど、傑作なこともありました。

第 1 図

被検者氏名			
年 組			
月	日	才	性別 男 女
感じた味に○印をつけて下さい。			
甘い、酸い、苦い、しぶい、からい、			
無味、これら以外の味()			

(ロ) 文化祭の実験の結果

これは文化祭の終わった後3ヶ月ばかりかかって仕上げたものです。

ここに実験の結果を載せます。

11月2日

	無味		苦味		甘味		淡味		辛味		酸味		複合	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1年	4	0	21	7	0	0	4	0	1	0	1	0	9	0
2年	6	0	31	8	0	0	2	0	1	0	2	0	3	0
3年	6	0	28	6	0	0	3	0	1	0	0	0	11	1

11月2日の実験の結果、「苦味と酸味」「淡味と酸味」の様に複合した味がでていました。残念な事は女子の被検者が22人と少なかった事です。

11月3日

	無味		苦味		甘味		淡味		辛味		酸味		複合	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1年	10	0	58	6	2	0	10	0	1	0	0	0	1	0
2年	15	1	54	4	1	0	4	0	3	0	1	0	4	0
3年	17	1	70	7	1	0	9	1	1	0	0	0	3	2
外	2	0	5	1	0	0	2	0	0	0	0	0	4	3

(※ 外-外来者)

11月3日の結果として、始めて甘味だけを感じた人がいました。(昨日は複合の味を感じた人の中に甘味も感じるという人はいました。) 又外来者の参加・女子の参加は少なかった様です。

2日間の総計.

無味	58人	—————	12.7%
苦味	306人	—————	67.3%
甘味	4人	—————	0.9%
辛味	8人	—————	1.7%
淡味	34人	—————	7.5%
酸味	4人	—————	0.9%
複合	41人	—————	9.0%

(実験者数 455人)

2日間を調べた結果、味盲は12.7%となり、第1表の「吉川・萩田」の結果とほぼ同様になります。

(3) 味盲者の家庭

これは、文化祭においての、味盲者の方にたのんで家族にどの程度の味盲者があらわれているかを調べたものです。この時なかなか家族のを持ってきてくれないので、これで時間を少々空費しました。実験対象となった家族は21家族です。

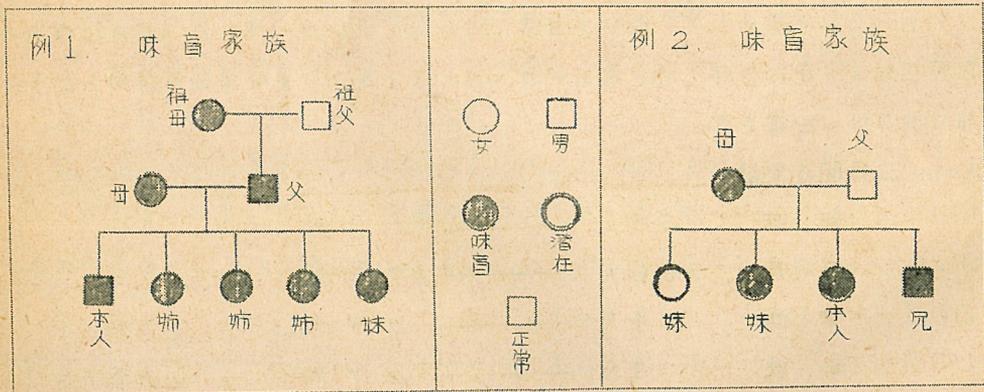
結果として両親が味盲で家族全員味盲が3、両親が味盲で家族に味盲のでない人の居る家庭が2ありました。説明書によると両親が味盲の場合は全員味盲となるわけですが、この理由として、舌の感覚の程度がちがうのか、どの程度までを感じたのか、表現の差だろうと思いました。

割合を出してみると、実験対象者96人で、

無味 — 51人 ——— 53.1%
 苦味 — 40人 ——— 41.7%
 淡味 — 5人 ——— 5.2%

となります。

	無味	苦味	淡味
本人	21人		
父	10人	7人	1人
母	6人	8人	4人
兄	5人	3人	
弟	2人	10人	
姉		8人	
妹	6人	4人	
祖父			
祖母	1人		



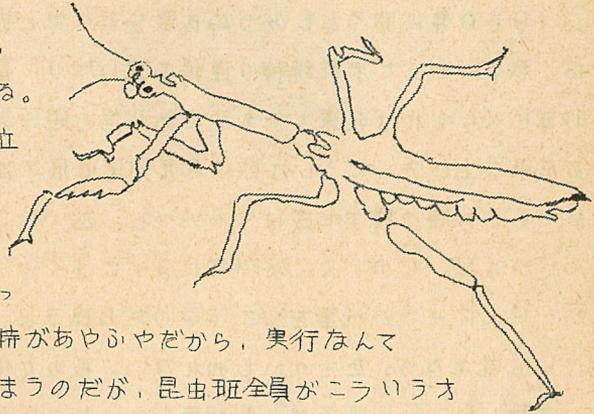
姉には1人も味盲のいないのと弟には少ないのが、少し面白いと思いました。このように表を見ますと、まだはっきりしない部分がある部分が多いので、この次にはもっと正確な統計を出そうと思っています。

完

1961年昆虫班の反省

2年 武智 昭一

毎年秋になって思うのだが、
計画倒れとはいやなものである。
今年も春にはいろいろ計画を立てたが、実行したのは佐多岬
採集旅行だけで、あとはそ
の時の気分で棄て去ってしまった。



た。大体計画を立てる時の気持があやふやだから、実行なんておぼつかないものになってしまうのだが、昆虫班全員がこういうオメダタイ人間ばかりなのだからしかたがない。春の田圃いっぱいレンゲや、山かげにひっそりと花をつけた野イチゴの花の匂いが、風に乗って吹いて来たりすると、僕達はめんどろくさい計画な人がすぐに忘れてしまうのである。そしてカミキリムシとかユガネムシとかカワイラシイ、キレイな虫ばかり追っ駆け回してしまうのである。ここに今年のズボラブリヤ、楽しかった採集、苦しかった標本作成、文化祭の準備などについて反省してみよう。



若葉の燃え始める頃、新一年生が入って来る前に我々はすばらしい計画を立てた。「小倉市内のトンボ相調査。」なんとすばらしい題目ではないか。足立山、福智山、紫川流域と地図をなげ、各地域別に班分けして、2週間に1度調査しようと議論したものだ。たしかに新学期が始まる前までは、このすばらしい計画に胸をひくらませて、前途洋々たるものであった。しかしいざとなってみると、入部した一年生の中で昆虫をやりたいというのは、大西君ただ一人だった。ここに第一の誤算があらわれ、出鼻を大きくくじかれた。それでも、北九州昆虫趣味の会月報“WORM-SHIP”に御協力請うの一文を載せ、また2・3回は小倉城の壕へ採集に行った。ここまではまともに話せるところであるが、第二の誤算によってかのズボラシイ題目ほどに返く

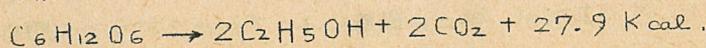
風となった。第二の誤算とはトンボ採集意欲の喪失である。残念ながらついスバラシイ題に心酔しているうちに秀えつかなかつたらしい。というわけで気がついた時はあのまつりとなり、採集中トンボが採ってくれよと飛んできて、「ああトンボを採らねばならぬのやったなあ」ぐらいで終ってしまった。かくしてトンボ相調査の奥行は初めの2・3回でお流れとなってしまったのである。さて一般の昆虫採集においては1960年に勝るとも劣らぬ成果を上げたと思う。延べ6回に亘る障子岳での採集は、我々にとって未記録種の連続で驚いたり、喜んだりであった。福智山での採集も昨年にくらべれば充実したものであったと思う。佐多岬採集旅行においても昨年同様の成果を上げた。こうして秋の北九州昆虫展では、見事学校賞を勝取ることができた。ただしこの時の標本作成はつらかつた。たった2日半で17箱を仕上げねばならなかつたからだ。しかしみんな必死になってよくやったと思う。夜遅くなくても、みんないっしょに一つの仕事をしているのだと思うと、奥に楽しい。この楽しさは昆虫班だけしか味えなかつたものかも知れない。秋の文化祭も盛大にやったと思う。昆虫班として新しいことといえば、説明員をつけたことぐらいしかなかつたけれど、標本の内容はグンと充実したと思っている。文化祭をもって一応この年としての活動は終るのだが、昆虫班として残された課題は、秋から冬にかけての空白期間をいかに利用するかということにあると思う。ただ部室にきて夏の思い出に花を咲かせ、また冗談をダベッていても時間の浪費である。適当な室内研究の材料を見つけてやるか、それとも成績は夏落して冬上げるという生物部のモットーに徹するかである。

◀ 酵母の発酵 ▶



2年 井上 浩 輔

我々の生活において、少くとも欠かせない発酵を、身近にあるイースト菌（圧搾酵母）によって新たに確認し、さらに発酵についての内容を深めるために、この実験を行った。発酵とは諸君、御存じのように酵母が酸素なしで炭酸ガスを出す無気呼吸であって、反応式は次のようになる。



上式よりわかるように、ブドウ糖等、有機物が酵母によって分解されるのであるが、この時 27.9 Kcal の熱量が出て、生物体はこのエネルギーで生活しているのである。パン製造はこの反応式を応用し、出てくる CO₂ でパンをふくらませている。

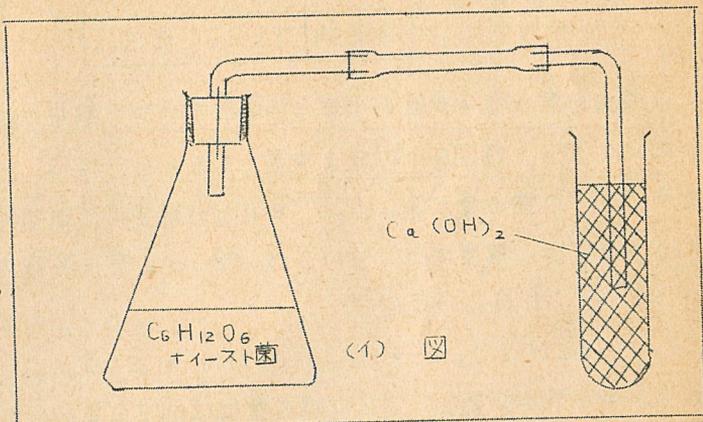
実験準備

- 材 料 — 酵母（純培養の菌体。実験ではイースト菌を使用）
- 器 具 — キューネ酸酪管、綿栓、保温器、ビーカー、メスシリンダ、三角フラスコ、顕微鏡、試験管。
- 薬 品 — ブドウ糖 50g、アンモニア（原液 1cc）、酢酸（C₂H₄O₂（50% 液）1cc）、MgSO₄（塩）、Ca(OH)₂（消石灰）

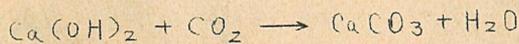
実験 I （昭和 37 年 3 月 17 日）

前述の炭酸ガスを確認するために (1) 図のような装置をつくる。

蒸留水 140 cc 中に 25g の無水ブドウ糖を入れ、15% のブドウ糖液をつくる。15% ブドウ糖溶液をフラスコの中に 20 cc 入れ、パン酵母 小さじ一杯を加える。一方試験管中に 20% の水酸化カルシウムの溶液を入れ、フラスコと試験管を



(1) 図のように連結する。温度 35°C に保った保温器中にこの装置を入れ、1 時間位おいておく。ブドウ糖中よりアワが出て、試験管中へ通じる。このアワにより試験管中の溶液が白くにごった。この反応式は、



となり、炭酸ガス（CO₂）の出る事が確認された。又、フラスコの中に火のついたマッチ軸を入れると消える事からも判断する事ができた。水酸化カリウムを入れても、炭酸ガスがなくなる事より炭酸ガスを確認する事ができるそうだが実験はせず。

実験 II

前の実験により、炭酸ガスが認められたから、次に温度やブドウ糖の濃度の変化に

よる (CO₂ 発生の実験をした。一方がふさがったキューネ酸酵管を用いる。

(1) キューネ管の中に彎曲部の半分がつかないようにブドウ糖溶液 (15%) を入れ、同じ量のイースト菌を2本のキューネ管に入れ開口部を綿で栓をした。

(2) (1)と同じようにブドウ糖液を入れたのであるが、一本には 15% 溶液を、もう一本には 7% 溶液を入れ、(1)と同じ量のイースト菌を入れた。

(1)の装置の 1本を(1)、(2)とし、(2)の2本の内 15% 溶液を(1)、7% の溶液を(2)とする。

(1)は 18°C の空中で放置、他の3本は、35°C に保った保温器中に入れ1時間おく。それから再び4本の試験管を常温中で2時間おく。

結果は次の(ロ)図のようになった。

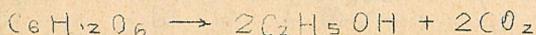
(ロ) ①

時間 \ 温度 °C	18°C	35°C
1時間	5 cc	8 cc
3時間	13 cc	13.5 cc

②

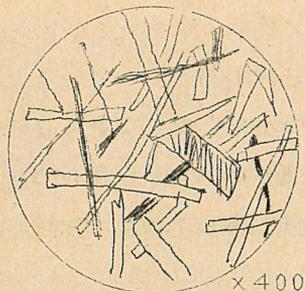
濃度 \ Time	15%	7%
1時間	3 cc	2 cc
2時間	8 cc	6.5 cc

(ロ)図からわかるように、温度は適当に高い方が酵母の醗酵は早く行われる事がわかった。しかし、時間をそのまま放置しておく、ほぼ、同じ程度の気体 (CO₂) が出る事から、ブドウ糖の量が等しいと、それが分解されて出る気体の絶対量は変らない事がわかった。又、濃度の点においては、明らかに濃い溶液の方がより気体が出る事がわかったが、これは次の反応式

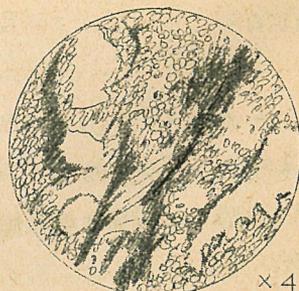


から、出る気体の量は、ブドウ糖の量に比例する事がわかる。キューネ管はなまぬるく、アルコールくさい事から、エチルアルコールの出来た事がわかった。ここでブドウ糖の結晶とイースト菌を顕微鏡ののぞいたものをのせておこう。(ハ) 図。

(ハ)
図



ブドウ糖結晶



ブドウ糖にひたし5分後の酵母

実験 III (昭和37年3月19日)

酸・アルカリ・塩に対する酵母の働き。実験 I, II を進め、酵母の酸・アルカリ・塩に対する反応を調べるために次のような実験をした。(1) 蒸留水、(2) ブドウ糖中に 50% のアンモニア 1 cc、(3) ブドウ糖中に 50% の酢酸 1 cc、(4) ブドウ糖中に $MgSO_4$ (硫酸マグネシウム 0.5 g) (5) ブドウ糖のみ、

(以上、ブドウ糖は 15% 液である)

以上、5つのキューネ管装置を $35^{\circ}C$ に保った保温器に 30分、60分の CO_2 の出る量をはかった。

結果は次の表、(=) 図の如くになった。

液の種類 time	蒸留水	アンモニア	酢酸	$MgSO_4$	ブドウ糖
30分	0 cc	0.1 cc	0.2 cc	5.5 cc	7 cc
60分	0 cc	0.2 cc	0.3 cc	9.3 cc	13 cc
色	無色	淡黄白	薄透明	淡黄白	黄白
12時間後	0 cc	15 cc	0.3 cc	15 cc	15 cc

(ただし、キューネ管の容量は 15 cc まで)

上の結果より次の事がわかった。

- ブドウ糖の入っていない蒸留水はだめ。
- 酵母は酸に、弱く、発酵することはできない。
- アルカリには初めの 1 時間まで発酵をきなかつたのに、12 時間後には 15 cc と 15 cc まで出ていたのは、菌が酸に対するよりも強いためであらう。
- 塩には、大体ブドウ糖だけの時と同じように働くことがわかった。

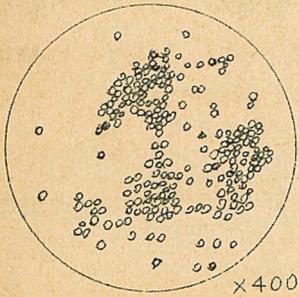
上の実験をした。(1) のキューネ管の中にブドウ糖を入れて、 $35^{\circ}C$ の保温器中に一時間程保つと、炭酸ガスが多く発生していた。

(1) の管は菌が死んだのではなく活動の場を失ったにすぎない、という事がわかった。しかし(3)の管の中に 2 cc のアンモニアを入れて中和して、 $35^{\circ}C$ 中に保つてもアワは容易にできてこない。これにより菌が酢酸によって殺されたが、動きを弱められたかを想像する事ができる。

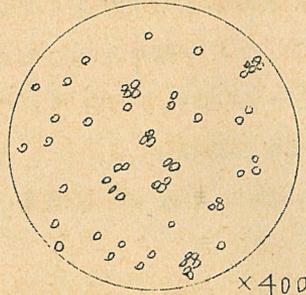
次に5つのキューネ管内の液の状態を知るために、液を取り出して顕微鏡で見えた。溶液は 1 時間後のもの。(=) 図 — (次頁参照)

(ホ)

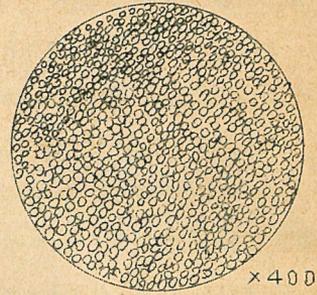
四



アンモニア・酢酸中



塩水・ブドウ糖中



蒸溜水

この図によると多くの CO_2 の出たものほど酵母の菌が散在していることがわかる。又、濃度の濃いブドウ糖液に菌をつけ、顕微鏡で5分後、10分後のようすをみた。これにより、酵母の働くさまが手にとるよう見え、炭酸ガスの気泡のヶ所がきまてくるのが見られた。

以上酵母の働きについて調べたが、酵母の量などは大体の所で、正確なものかは、わからないが一応、実験としては成功であった。酵母の他の力をかりずに簡単に炭酸ガスを発生させる偉大には目頃づかぬ事であるが、この実験を通して大いに、おどろかされた。そしてこの実験も一個の生物体の生きるためのささやかな活動だったという事を確認して、この実験を終える。

私と羊歯植物

3年 新谷 雅宏



今、みじかかった高校生活三年間をふりかえってみると、僕の心には楽しかったクラブ生活だけが思い出され、苦しき試験の事など少しも思い出されないので不思議である。まがりなりにも三年間、羊歯植物を研究した者として、最後に何が書いておこうと、筆を取る次第である。まず、羊歯とはい

かなる植物か？ 古生代のはるかな昔、ある単純な藻のようなものから、石炭紀には大森林をつくる大きな植物へと発達したのだろう。鱗木、蛇木、封印木、蘆木等といわれる植物がこれである。これは現在に至って、リュウビノタイ科、ヒカゲノカズラ科、イワヒバ科、トクサ科、マツバラノ科がその系統をひいている。次に自分はなぜシダを研究するようになったか。それは「羊歯の美」である。左右対称を存したその美しさは、単純素朴でそれはあたかも墨絵のような美しさである。たとえば葉の形、四季おりおりに変る色と光沢、茎葉に生ずる鱗片等数々の変化の中に見られるシダとしてのまとまり、これが僕を大いにひきつけたのだ。ここでシダと人生について少々述べてみよう。食べられる羊歯には、ウラボ、ゼンマイ、ツクシ、クサソテツなどがある。ウラボには一種の毒があり、よくあく出しをして、味噌汁としたり、油揚げと一緒に煮たり、青いまま塩漬けにして、食膳に供している。ゼンマイは乾物として、ビタミンの供給として長い航海をする船に積み込まれる。クサソテツは、若芽をゆでて、マヨネーズ・ソースをかけて食用とされる。長野県ではこれを「コゴミ」と呼び、青漬けにするそうである。これについて、高村光太郎の作品に次の文がある。

『上州清水トンネルがまだ開通しない頃の事だから随分昔の話である。六月初旬私は、湯浅から利根川に沿って、藤原の里を過ぎ入って人っ子一人通らぬ荒々たる残雪の上野原の高原から、茶碗ころがしの急坂を下りて、湯の小屋まで行ったことがある。湯浅の町にはまだ、煙突から火の粉を吹く工事用の車が通ったり、丘では赤い旗を立ててハツパの合図をしたりした。河は此処から急回転する。その左側に沿って三里も行くと、夜後橋という古風な腐朽した橋があり、それを渡って右側へ出る。河が急に狭くなり雪どけの水が青く奔流している。巨岩怪石、その辺から藤原の里に入る。桑畑と水田とが山峡にまばらにあって、草屋根が飛び飛びに見える。路傍に一軒ある「おん中食」に足を入れると、土間が広く床に大きな囲炉裏がある。家人は皆畑に出ている、意外に上品な娘さんとその妹と、三羽の鶏とが留守をしている。此所で食べた野草の味は忘れられない。ウラボのようだが、ウラボよりも歯切れよく、ゼンマイのようだがゼンマイよりもしゃきりとしている。ただの煮つけであるが、其色青磁の雨過天青という鮮やかさにまがい、山野のかがり、着にただよい舌ざわり強くしかも、滑らかで噛めばしゃきりとしさぎよい。分厚な小皿に無雑作に盛られたのを黄塗りの長い竹箸をつまみながら「これは何ですか。」と聞くと、「コゴミ」だと言う。「コゴミで何ですか。」と聞くと「山にあるウラボみたいなものだ。」という。私は懐から植物図鑑を出して引くと、「クサソテツ」のこくと分った。あの谿谷の湿地を埋め



る猙獰な「クサソテツ」の芽がこんな微妙な高雅な前葉ものとなることを知り、面国の落武者の隠れ里であつたというこの藤原の村の娘の面たちに今でも残るゆかしい金薫と共に今日まだ忘れ難い記憶となっている。』
食物の事に書き過ぎたようだから次に移ろう。シダ類は、広域にわたる森林の林生植物として、その森林と共に、治水の役わりをはたしている。シダの美しさの面から、オオタニワタリ、タマシダ、オニヤブソテツ、イワヒバ、マツバラシ、クジヤクシダ、マツザカシダ、ヘゴ、イノデ等に私は強く引かれる。オオタニワタリは、佐多の採集旅行で、自分がかなり山奥へ入っていつて採つた事があるが、古い大きな大木の幹の中ほどにひっそりと生えているのは、なかなか感じのよいものである。このような無限の広がりを持つシダは私に今後の採集を盛り上げ、古代への懐古とも云うべき大いなる興味をおこさせてくれるのである。

部 員 住 所 録

部 長 高 原 道 男 先 生 小 倉 市 富 士 見 町
 副 部 長 太 田 国 光 先 生 小 倉 市 富 野

3 年

田中丸 邦雄	小倉市上富野富町
新 谷 雅 宏	小倉市東清水町
黒 田 裕 介	戸畑市清水町
江 副 憲 昭	小倉市果住町
亀 津 照 明	小倉市日明潮入町
西 哲 功	小倉市果住町
大 森 忠 志	小倉市上富野横内町
仁 尾 智	小倉市黄金町
菅 沼 邦 昭	小倉市室町
松 永 啓 子	戸畑市小沢見町
吉 田 哲 子	小倉市富野新町
浜 田 勝 子	門司市錦町
川 崎 淳 子	小倉市木町

2 年

中 野 国 政	戸畑市祝町
武 智 昭 一	小倉市若園町
酒 卷 正 昭	小倉市朝日ヶ丘
井 上 浩 輔	小倉市富野新町
野 村 茂 治	小倉市白銀町

久野晃義	戸畑市古池町
伊藤正彦	小倉市原町
西野憲史	八幡市荒生町

1 年

森 聖	小倉市瑞穂町
木村邦夫	八幡市高見町
大西忠士	小倉市高峰町
新上義昭	八幡市枝光町
佐藤幹雄	若松市本町
安田敏子	戸畑市二坂町
松永妙子	戸畑市小沢見町

編集後記

我々、生物部員活動の結晶であるユーカリ計画を立てた時、はたしてできるのだろうかと心配でしたが、どうにかこうにか、ここまでこぎつけた事を非常に喜びとしております。

不馴れなため色々と不手際が多く、計画がのびのびになり、発刊が遅れて残念に思ってます。又、内容も研究的なものが少なく、採集旅行的なものに片寄った事も、我々の活動になにか欠陥があったのではなからうかと、反省させられます。しかし、いつも試験に追われて研究らしい研究をする時間が少なくなりつつあるということは遺憾な事です。

ユーカリも、これで10号を数えた事は、我々生物部の発展のためにも大きな足跡になることでしょう。これからも、採集に、研究に、若い力をそそぎ、リッチな成果を上げてもらいたいと思います。

K・N 生

部誌 ユ一カリ 10号

発行 1962年3月31日

編纂者 福岡県立小倉高校生物部

代表者 中野 国政

顧問 木田 国光

印刷 後藤 商店

